

繊維競合原理の研究 (Ⅱ)

—日本における繊維競合—

宮坂正治

信州大学繊維学部経営工学研究室

われわれがここで最も強調したい繊維競合現象の一つは、合成繊維の出現によって長期の繊維物価水準が漸次に絶対的にも相対的にも低下の方向を辿るのであるという事実についてである*。

家本秀太郎

1 ま え が き

天然繊維 (natural fibre) である、綿糸、生糸、毛糸などの生産や消費の歴史は、日本はもとより、世界的な視野からいっても古代や中世にさかのぼるといってよい。屢々いわれるのは、「綿・毛・麻・絹等の天然繊維は、少なくとも紀元前数千年以上の昔から人類によって利用されてきた。エジプトの古墳の中からは紀元前4000年頃と推定される麻織物が発掘され、インダスの谷からも紀元前3000年頃と思われる綿糸や綿織物の一部が発見され、中国の絹の起源もまた紀元前2600年頃に遡ると伝えられる。」¹⁾ という、天然繊維の歴史の古さである。しかもこの天然繊維は、繊維の中では長期的に支配的な位置を占めていた。わが国に例をとってみてもわかるように、明治、大正、昭和4年頃までは、生糸を中心として、まったく天然繊維は、衣料用、家庭用または産業用として支配的であった。

しかし、人造繊維 (man-made fiber) も、この天然繊維の歴史に負けないぐらいの伝統をもつのである。たとえば、「人造絹糸の着想は非常に古く、ルネッサンスの開花が科学の領域に及び始めた頃に既に現われており、例えばイギリスの物理学者フック (R. Hooke) の『ミクログラフィア (Micrographia) ; 顕微鏡絵図』(1664年)、フランスの生物学者レオミュール (R. Réaumur) の『昆虫の歴史に関する覚書 (Mémoires pour Servir à l'Histoire des Insectes. Vol. 6.)』(1734年) の中にその着想が見られる。」²⁾ といわれる。それ以降幾多の変遷を経て、これが実用化し、人造繊維は、日本においても、大正時代には、産業として勃興しているのである。日本についてみると、人造繊維産業、とくに化繊産業が、「第1次大戦期以降に勃興した新産業でありながら、日中戦争勃発前にすでに日本の産業構造の中で重要な地位を占め、しかも戦前の日本産業の中で、製

* 家本秀太郎「繊維競合(1)」1972、未発表原稿、p.3. Hidetaro Iyemoto: Textile Inter-Fibre Competition. (Toyobo Economic Series, No.3, Institute for Economic Research Toyobo Spinning Co., Ltd, Osaka, Japan, 1957.)

1) 大原総一郎『化学繊維工業論』東京大学出版会、昭.36、p.43.

2) 大原総一郎『前掲書』p.44.

糸業以外で世界一の生産水準を達成した唯一の高成長・大規模産業だったという事実が指摘させるべきである。このうち、化繊産業が第1次大戦期以降に勃興した新産業であるという点については、例えば、斯業におけるトップメーカーである帝人の創業が大正7年であったという一事を指摘するだけでじゅうぶんであろう。³⁾といわれている。

人造繊維は、たしかに天然繊維に比すれば、創出の歴史は浅いけれども、たちまちのうちに、天然繊維を席卷しはじめ、日本でいえば、昭和の初期頃から逐次天然繊維に代替してきているのである。一体、このような迅速にして確実な歩みで、人造繊維が天然繊維と競合うままでに発達したのは、どのような原因によるのかという問題はきわめて興味がある。

従来、天然繊維と人造繊維との競合原因は、「価格と最終製品に与えられる繊維本来の性能及び加工技術による補強と修正を加味した品質を直接の要因として展開される。」⁴⁾といわれる。また、あるひとは、繊維競合の条件をあげるとすれば、次の3つとなるという。すなわち、「1.各繊維の品質性能及びその改良、向上から来る相対効用の変化。2.各繊維の価格の変動からくる相対価格の変化。3.相対効用と相対価格の関係⁵⁾によって、繊維間競合が行なわれるといわれる。最近の繊維競合について新たな展開についてユニークな研究をなされたひとの競合要因の考え方を、さらにつけ加えておく。2番目のひとつと同様、3つの競合要因をあげておられる。すなわち、「①個々の用途の要求特性。これには、物理的・化学的に繊維自体が保持していなければ製品として機能を果たしえない基本特性と、ファッション性に代表される嗜好要素の強い特性とがある。②各繊維素材のもつ種々の性能。これには各繊維に本来的に備わっているもの以外に、技術的改良・改質により付加された特性も含まれる。③相対価格。素材の相対コストが最も重要であるが、加工コスト、製品の使用段階での維持コストなども競合に決定的な影響を与える場合がある。」⁶⁾という考え方である。

このように、従来の優れた研究成果から総括すると、天然繊維と人造繊維との競合の原因は、価格と品質もしくは性能の二つであるといえる。もはや、この繊維競合の問題は、原因追求にかぎり必要ないように思われるが、日本の最近の繊維競合状況を概観して、競合の直接的・間接的要因を、あらためて考察する必要があるように考えられる。というのは、繊維競合のイメージとしては、天然繊維が人造繊維に最近では絶えず侵食されて、天然繊維がすべて後退しているようにみられているが、必ずしもそうとはいえないという現状がみられるからである。そこで、本稿では、主として繊維間競合の現状の認識ということに重点を置いて、衣料用の繊維消費量の最近の推移をうかがい、その繊維間競合の要因を探る「手がかり」を掴もうとする素材としたい。したがって、まずはじめに、日本における衣料用繊維の競合状況の実態を考察することに取組むことにする。

3) 山崎広明『日本化繊産業発達史論』東京大学出版会、昭.50、p.4.

4) 大原総一郎『前掲書』p.303.

5) 伊東光太郎『繊維競合の問題点』日本学術振興会、昭.31、p.3.

6) 今村文繁「繊維間競合の新たな展開—ポリエステル繊維を中心として—」(『東洋紡績株式会社経済研究所報』1981年5月号、p.9.

2 最近の日本における繊維競合の特色

繊維競合についての問題解明のために、いままでも優れた研究も多いが、どちらかといえば、資料・情報の関係からと思われるが、アメリカの繊維産業を事例にしておられる⁷⁾。幸い最近、日本における繊維競合を追求する資料も現われ、これらによって、本稿では、繊維競合の状況をうかがうことにする。

さて、もう一度、繊維競合とは、一体どのような現象をいうのかを考えてみる。繊維競合は「繊維間の選択としてとらえられる⁸⁾」として、「具体的には用途によって競合の性格を異にするので、用途別の動向を把握する必要がある。これには最終用途別に各繊維の消費量を明らかにした時系列資料が有用である。⁹⁾」と考えられているひともある。また、繊維競合とは、「個々の繊維用途の要求特性に対し、それに見合った性能を発揮できる繊維素材が、輸入品を含めて相対価格との見合いで使い分けられる現象を指す。競合の実態は同一用途における繊維素材別国内消費量割合によって表わされる。¹⁰⁾」としておられるひともある。本稿では、後者の説を採用して、衣料用における同一用途の繊維素材別国内消費量の構成比について、主として昭和45年から同57年までの期間の推移をうかがいながら、天然繊維と人造繊維の競合現象を探ることとしたい。

(1) 衣料用繊維分類別競合

繊維競合現象を研究する場合、一つにはこの現象の概観をするために、衣料用繊維を基準として、どのような繊維がいかなる盛衰の様相を呈しているかを討究することと、他の一つは、競合現象のうち品質もしくは性能を探る意図を重点として、衣料用商品別もしくは衣料用用途別繊維素材別考察を行なうこととし、はじめに前者の場面を観察する。

日本における衣料用繊維の種類別消費量の総量をみるべく第1図を描いてみた。この図から明らかのように、昭和37年から同57年の間において、同51年以降を除いて綿が終始第1位の消費量を占めている。綿は昭和37年の23万トンの消費量から同48年の石油ショックの時期まで順調な発達を遂げ、同49年にはひどく下降し、同51年から少しずつ回復し、同54年にはまた同48年の上昇点近くに消費量が増加している。第2位の消費量の繊維は同51年以降の第1位を除き、合成繊維となっている。昭和37年から同47年までがスフが第3位、同48年から同57年までは毛が第3位をほぼ占めている。人絹、アセテートおよび絹は交互に盛衰を繰り返しており、麻がこの期間最低消費量となっている。

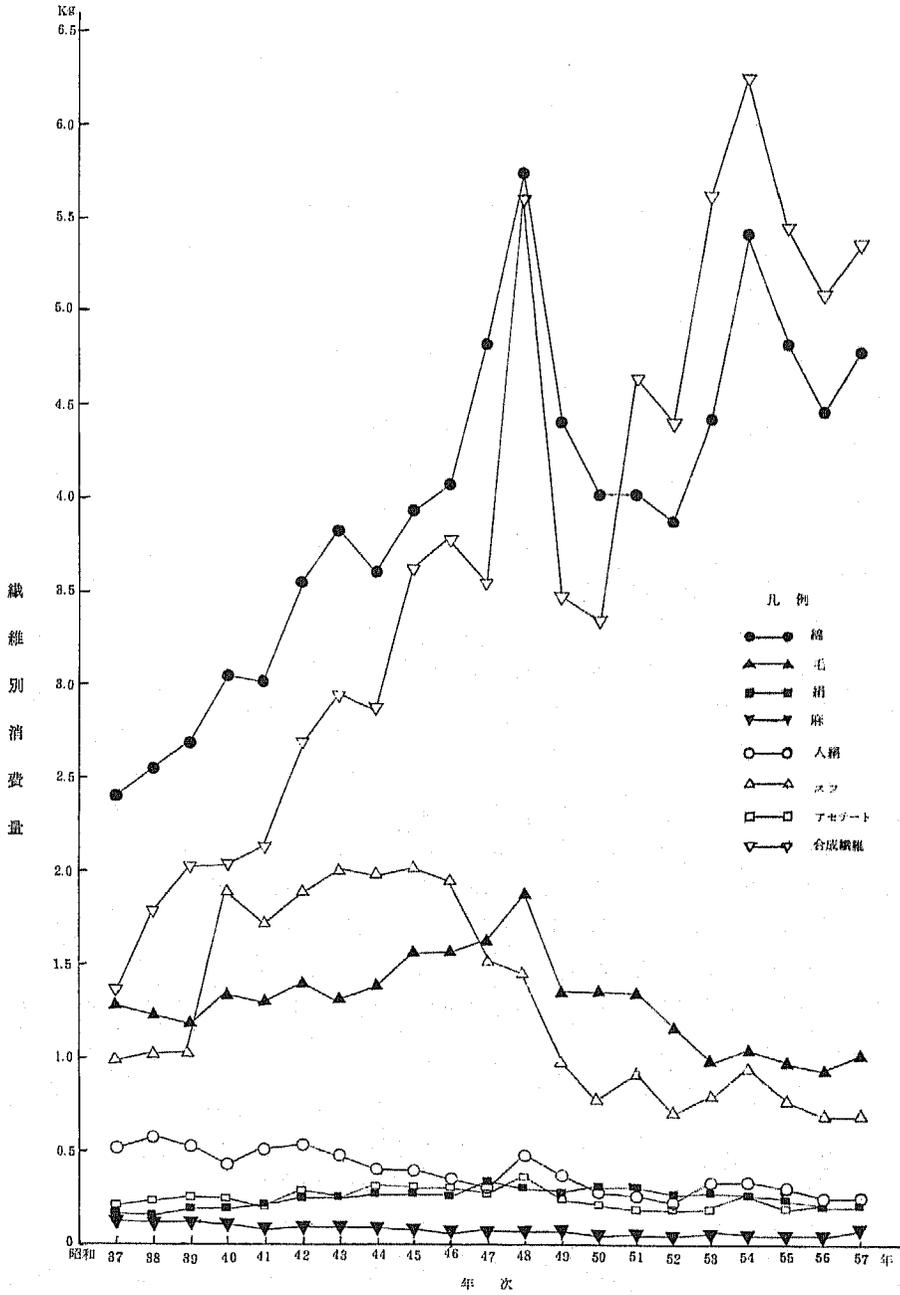
このようにみえてくると、繊維消費量の総量では綿と合成繊維が逡増するのに反し、毛とスフが逡減傾向にあるというのが、昭和50年以降において顕著にあらわれている。ここからみると、天然繊維と人造繊維との競合というのではなく、天然繊維間、人造繊維間

7) 代表的なものは、家本秀太郎氏の一連の繊維競合の研究をあげることができる。これについては宮坂正治「繊維競合原理の研究(I)一序説一」(『信州大学繊維学部紀要』昭.58. pp. 1—)を参照されたい。

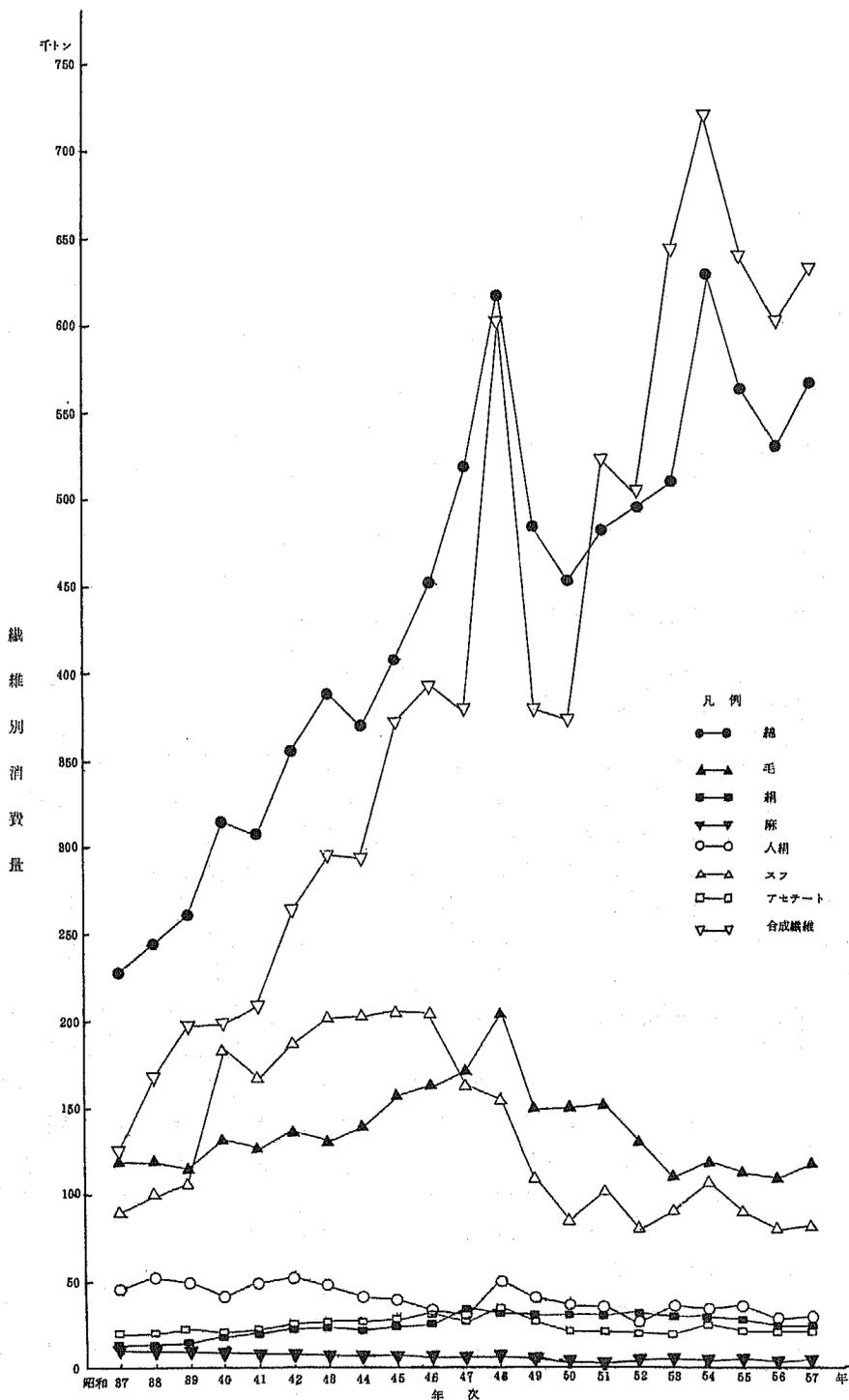
8) 大原総一郎『前掲書』p. 312.

9) 大原総一郎『前掲書』p. 316.

10) 今村文繁「前掲論文」(『前掲誌』p. 8.)



第1図 日本における衣料用繊維別消費量総量の推移
 (注) 『日本繊維統計年報』の各年度のものにより計算し作成。



第2図 日本における国民1人当たり衣料用繊維別消費量の推移
 (注) 『日本繊維統計年報』の各年度のものにより計算し作成。

の競合も行なわれていると推察される。とくに人絹、アセテート、絹との競合は低消費量のまま競合現象のあることが見受けられる。この図からは、どの繊維がいかなる繊維に代替して伸びてきたかを明らかにすることはできないけれども、綿と合成繊維の間、毛とスフ・合成繊維との間において競合関係がかなり存在している現象は推察される。

このような繊維間競合現象は第2図の日本における国民1人当たり衣料用繊維別消費量の推移からも同じような推論がなされる。

両図から同じようなことがいえるのは、昭和48年の高度経済成長期と同53年の安定経済期において綿と合成繊維がきわめて大きな消費量を占めており、これらの繊維があまり明確な形であらわれているとはいえないが、およそ4年から5年の周期で上昇・下降を繰り返していることは興味深い。この点立入って研究することは大切であるが、ここでは省略することとする。

わが国における繊維競合の現況を主要な繊維の衣料に占める構成比について昭和28年から同54年までの推移を図化すると、第3図のようになる。この図から明らかなように、昭和28年から同36年までの間は断然綿の比率が大きく第1位で、約40%から約50%までの構成比となっており。第2位のグループは毛・スフ・人絹となっており、これらの構成比は約10%前後の構成比のまま一群をなしている。第3位のグループは麻・アセテート・絹であって約2.5%以内の構成比できわめて低い値のまま推移している。この期間をみると、天然繊維の綿が優位の地位を占めてはいるものの、次第にスフ・人絹・アセテートによって代替されつつあることを示し、また、絹はまったく衣料用としては低位に落ちてしまったことを表しているといえる。

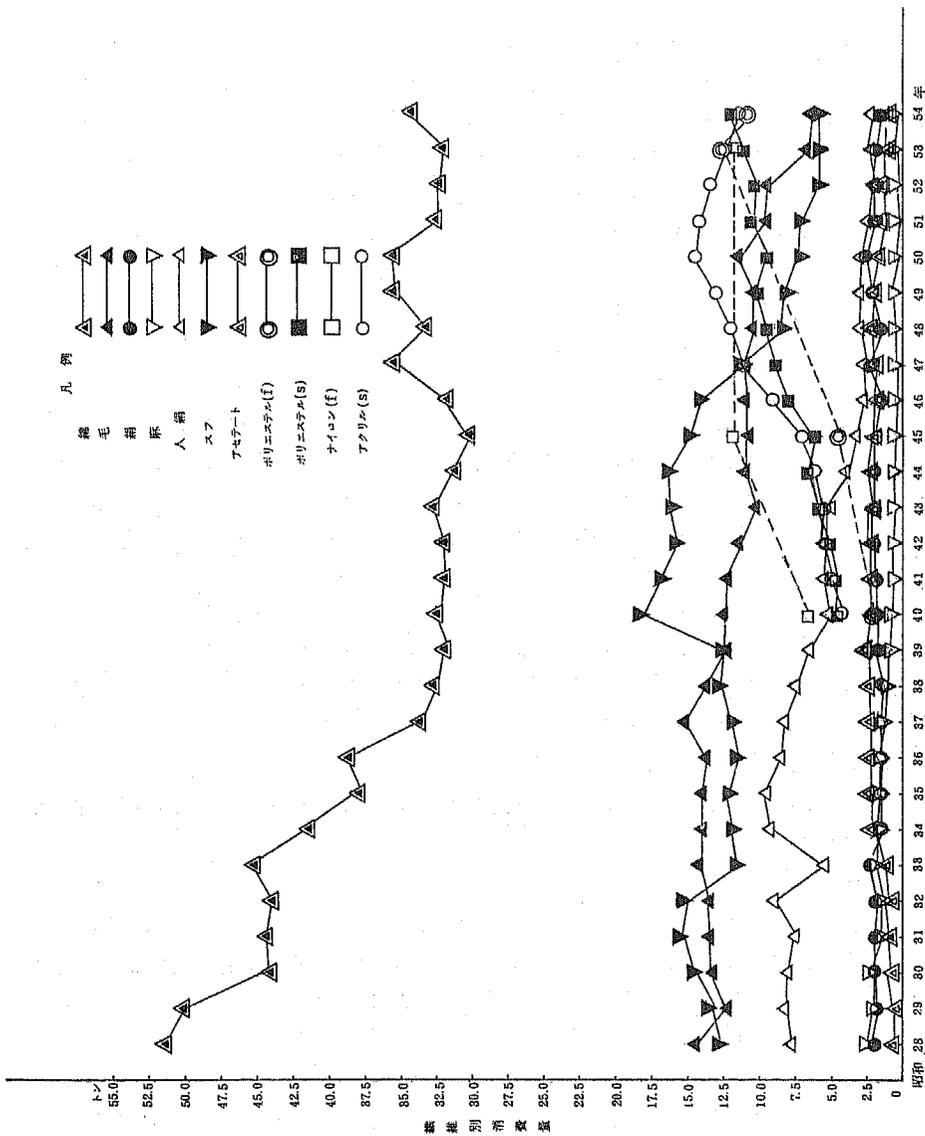
ところが昭和37年から同47年までの期間になると、綿は相変わらず高位の位置を占めてはいるものの、漸減傾向にあり、また毛も絹も落ちこみ、天然繊維に代替して、スフやナイロンの人造繊維が勢を増し、構成比上漸増傾向という形で繊維競合がなされている。さらに、昭和48年から同57年になるにしたがい、天然繊維の綿は若干勢力をもり返したものの、毛、絹、麻はだんだん比率は低下してきたが、それらに代替するかのようになり、人造繊維のアクリル(s)**、ナイロン(f)***、ポリエステル(s)およびポリエステル(f)のような人造繊維の構成比が伸びてきたのである。

以上のように天然繊維と人造繊維について昭和28年から同54年までの敗戦後の落ちついた時期から高度経済成長期を経て停滞の時代に入るまでの過程の中で、代替関係をうかがうと、戦後において、「ナイロン及びビニロンの工業化の過程と相前後して、繊維会社の多くが合成繊維部門の強化を図り、又新たな進出を計画し、わが国の合成繊維工業は急激な発展を続けて、(昭和)31年には早くもアメリカに次ぐ世界第2位の地歩を占めた。」¹¹⁾といわれるほど、人造繊維が技術の革新により価格の低下と品質もしくは性能の向上、さらには生産性の上昇があった証左とみてよからう。

(2) 衣料用途別繊維別競合

繊維競合現象を厳密に考察するためには、繊維の用途別素材の構成比をみななければならぬと考えられる。繊維を使用した衣料には紳士用、婦人用、男児・女児・乳児用、そ

11) 大原総一郎『前掲書』pp. 173~174. **SはStaple(短繊維)。***fはfilament(長繊維)。



(注) 今村文繁「繊維統計資料」昭. 58, 未公表資料によって作成。
 1) fは filament; 長繊維, sは staple fiber; 短繊維。
 2) fは filament; 長繊維, sは staple fiber; 短繊維。

第3図 日本における主要繊維間競合の推移 (国内需用分)

の他種々あるが本稿では紳士用衣料型と婦人用衣料型との2分類して、繊維競合現象[※]を検討することにした。

(i) 紳士用衣料型

紳士用衣料にどのような繊維原料が主として使用されたかを昭和45年から同57年までの期間の構成比の差をみるために第1表を作成した。この表は、天然繊維として、綿、毛、絹及び麻をあげ、人造繊維は再生・半合成繊維と合成繊維とに分け、再生・半合成繊維としては、レーヨン、キュブラ、アセテート、ポリノジックをあげ、合成繊維としては、ナイロン、ビニロン、ポリエステル、アクリル、ビニリデン、ポリ塩化ビニロン、ポリプロピレン、ポリウレタン、その他合成繊維をあげ、これら天然繊維、人造繊維に明確に属していないものを「その他」とした。こうした繊維分類の方法は、他の婦人用衣料型を論議していく場合にもまったく同様である。紳士用衣料型の特徴を考察する前に、はじめに衣料用繊維別の消費量の総額の構成比により、繊維競合の現状をみて、前述の「衣料用繊維別競合」の考察に対し補完材料を提供することにした。

衣料用途別繊維消費量総額について、昭和45年と同57年との構成比の比較をしてみると、天然繊維で増加したのは、綿(+6.8%)のみであり、人造繊維で増加したのは、合成繊維のアクリル(+4.3%)、ポリエステル(+1.2%)、ポリプロピレン(+0.2%)、ポリウレタン(+0.1%)でかなり種類は多い。

それに対し、構成比が減少したのは、天然繊維では、毛、絹、麻であり、人造繊維では、再生・半合成繊維すべてと、合成繊維のナイロン、ビニロン、ポリ塩化ビニロン、その他合成繊維である。こうした状況をもう少し詳細な変化からみるために、昭和45年から同57年までの年次ごとの「国内需用繊維別消費量総額構成比」の推移を図示すると、第4図のようになった。総額からは、この期間に関するかぎり、天然繊維と人造繊維とは約半半ずつのシェアをもち、天然繊維の代表的なものは、30%前後の構成比を保ちつつある綿であり、人造繊維のそれは、20%前後の構成比を保ちつつあるポリエステルである。第2位に属するのは、天然繊維では、10%前後の構成比をもつ毛であり、人造繊維ではやはり10%前後の構成比をもつアクリルであることがわかる。

その他の繊維は僅かな構成比でとるに足らない。

このようにみえてくるとき、天然繊維と人造繊維という大分類では、繊維競合関係は明白な形では現われていない。

① 紳士用外衣

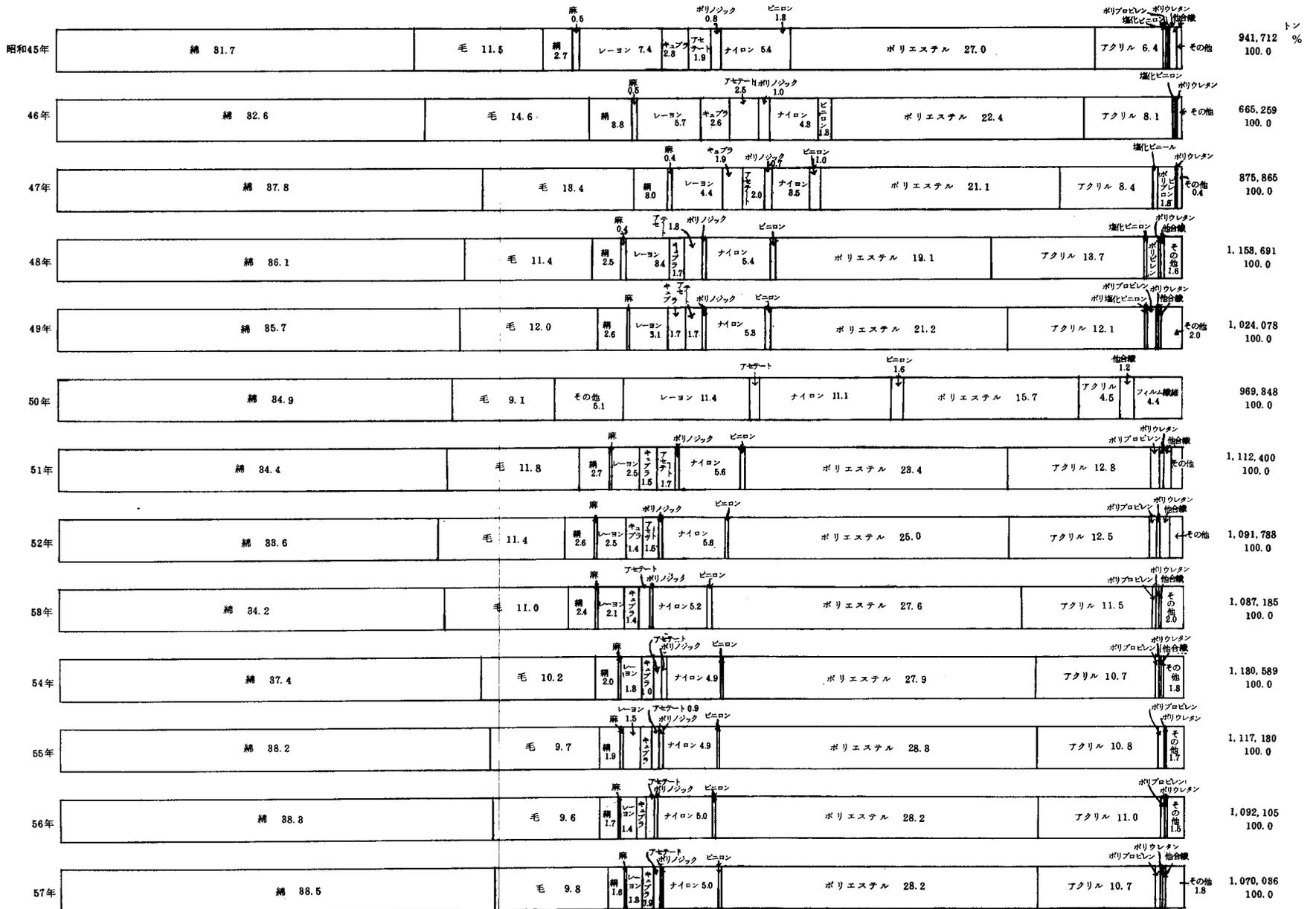
さて、紳士用衣料を対象にして繊維競合を考察するが、外衣と中衣のうち、外衣から始める。外衣では第1表の昭和45年と同57年との構成比の比較において、際だった現象は、天然繊維では、毛が-14.0%減り、絹が9.5%増加しているのに対し、人造繊維では、ポリエステルだけが6.4%増しただけで、他のナイロン(-1.4%)、アクリル(-0.4%)、ビニロン(-0.1)が少しずつ減少していることである。

この紳士用外衣の繊維素材の構成比の推移をさらに詳細にみるために、昭和45年から同57年までの推移を第5図で示した。この図から直ちにわかることは、紳士用外衣に使用した繊維の主要なものは、この期間を通し、天然繊維の毛と人造繊維のポリエステル

第1表 日本における紳士用衣料の各種繊維消費量構成比の変化 (%)

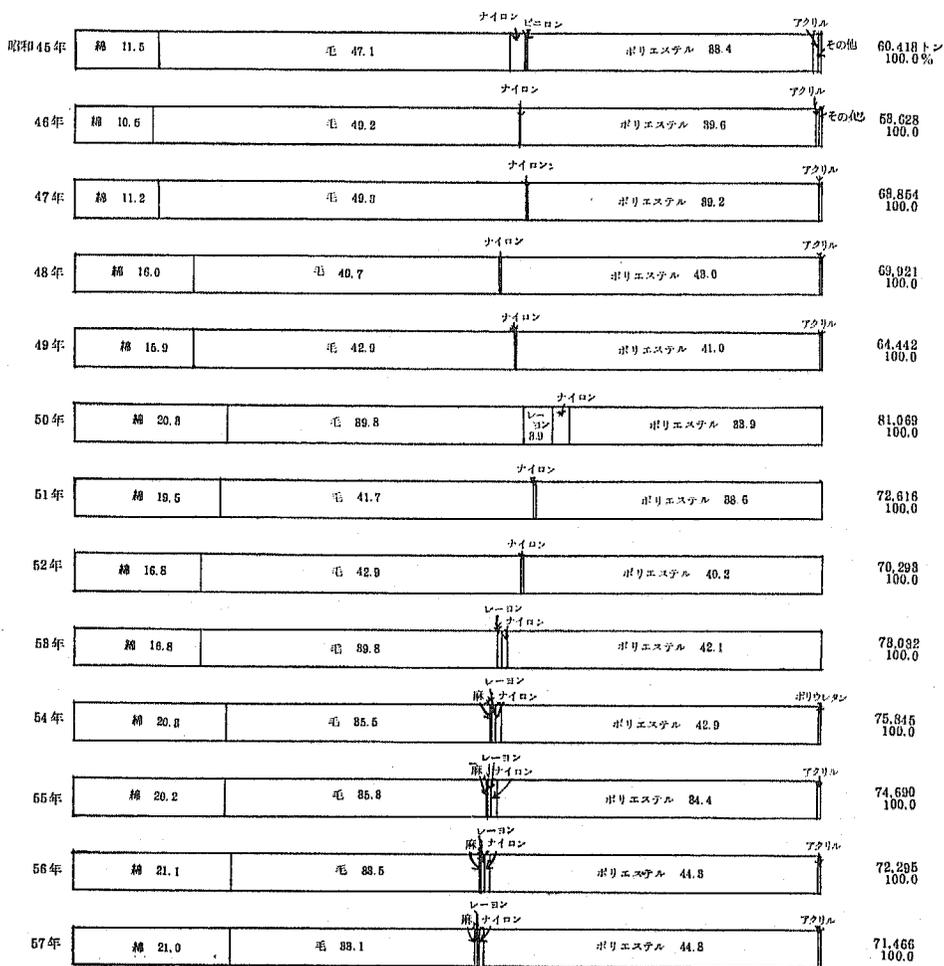
用途	年次(昭和)	天然繊維				人造纖維										その他	合計							
		合計	綿	毛	絹	麻	再生・平合成纖維					台成纖維												
							合計	レーヨン	アクリル	ポリエステル	ナイロン	ビニロン	ポリエステル	アクリル	ビニル			ポリビニル	ポリウレタン	他繊維				
総額	45年	46.4	31.7	11.5	2.7	0.5	12.4	7.4	2.3	1.9	0.8	40.8	5.4	1.3	27.0	6.4	0	0	0	0	0	0	0	0.4
	57年	50.2	38.5	9.8	1.6	0.2	3.1	1.3	0.9	0.6	0.3	44.9	5.0	0.2	28.2	10.7	0	0	0	0	0	0	0	0
		+ 3.8	+ 6.8	- 1.7	- 1.1	- 0.3	- 9.3	- 6.1	- 1.4	- 1.3	- 0.5	+ 4.1	- 0.4	- 1.1	+ 1.2	+ 4.3	0	- 0.1	+ 0.2	+ 0.1	- 0.3	+ 1.4		
紳士用 外衣	45年	58.5	11.5	47.1	0	0	0	0	0	0	0	41.1	2.1	0.1	38.4	0.6	0	0	0	0	0	0	0	0.4
	57年	54.2	21.0	33.1	0	0.2	0.1	0.1	0	0	0	45.7	0.7	0	44.8	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0
		- 4.3	+ 9.5	- 14.0	0	+ 0.2	+ 0.1	+ 0.1	0	0	+ 4.6	- 1.4	- 0.1	+ 6.4	- 0.4	0	0	0	0	0	0	0	0	- 0.4
紳士用 中衣	45年	35.8	30.3	5.3	0	0.2	0.2	0.2	0	0	64.0	0	0	0	59.1	4.7	0	0	0	0	0	0	0	0
	57年	61.6	49.6	11.8	0	0.2	0	0	0	0	38.4	0.4	0	0	23.5	14.4	0	0	0	0	0	0	0	0
		+ 25.8	+ 19.3	+ 6.5	0	0	- 0.2	- 0.2	0	0	- 25.6	+ 0.4	0	- 35.6	+ 9.7	0	0	0	0	- 0.1	+ 0.1	0	0	0
紳士用外 衣: オート ハット	45年	100.0	0	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	57年	100.0	0	100.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
紳士用外 衣: トット フコート	45年	18.4	5.8	12.6	0	0	0	0	0	0	80.4	0	0	0	78.5	1.9	0	0	0	0	0	0	0	1.2
	57年	30.6	22.2	8.3	0.1	0	0	0	0	0	69.4	0	0	0	69.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		+ 12.2	+ 16.4	- 4.3	+ 0.1	0	0	0	0	0	- 11.0	0	0	- 9.1	- 1.9	0	0	0	0	0	0	0	0	- 1.2
紳士用外 衣: レイ ンコート	45年	53.8	53.8	0	0	0	0	0	0	0	46.2	2.0	0	0	44.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	57年	34.5	34.1	0	0.4	0	0	0	0	0	65.5	0	0	0	65.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		- 19.3	- 19.7	0	+ 0.4	0	0	0	0	0	+ 19.3	- 2.0	0	+ 21.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
紳士用中 衣: トレ スシャツ	45年	22.9	22.5	0	0	0.4	0	0	0	0	77.1	0	0	0	76.9	0	0	0	0	0	0.2	0	0	0
	57年	18.5	18.1	0.3	0	0.1	0	0	0	0	81.5	0	0	0	81.2	0.3	0	0	0	0	- 0.2	0	0	0
		- 4.4	- 4.4	+ 0.3	0	- 0.3	0	0	0	0	+ 4.4	0	0	+ 4.3	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
紳士用中 衣: スポ ーツシャ ツ	45年	53.9	21.8	32.1	0	0	0.1	0	0	0	46.0	0.2	0	0	37.6	8.2	0	0	0	0	0	0	0	0
	57年	58.6	42.9	15.7	0	0	0	0	0	0	41.4	0	0	0	36.5	4.9	0	0	0	0	0	0	0	0
		+ 4.7	+ 21.1	- 16.4	0	0	- 0.1	0	0	0	- 0.1	0	0	- 1.1	- 3.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
紳士用中 衣: カ タ	45年	40.6	5.3	35.0	0	0.3	0.2	0	0	0	59.1	3.1	0	0	10.5	45.5	0	0	0	0	0	0	0	0
	57年	49.4	8.7	40.0	0	0.7	0	0	0	0	50.6	0.6	0	0	11.8	38.2	0	0	0	0	0	0	0	0
		+ 8.8	+ 3.4	+ 5.0	0	+ 0.4	- 0.2	0	0	0	- 8.5	- 2.5	0	+ 1.3	- 7.3	0	0	0	0	0	0	0	0	- 0.1

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の昭和45年と同57年のものにより作成。



第4図 国内需用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第5図 紳士用外衣の繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

昭和45年	毛 80.0	合 計 20.0	2,129 100.0%
46年	毛 74.7	合 計 25.3	1,656 100.0
47年	毛 100.0		1,656 100.0
48年	毛 100.0		1,218 100.0
49年	毛 100.0		1,189 100.0
50年			
51年	毛 100.0		1,610 100.0
52年	毛 100.0		2,128 100.0
53年	毛 100.0		1,845 100.0
54年	毛 100.0		1,239 100.0
55年	毛 100.0		1,191 100.0
56年	毛 100.0		1,168 100.0
57年	毛 100.0		887 100.0

第6図 紳士用外衣（オーバーコート）用繊維別消費量構成比の推移

(注)1) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

2) 昭和50年度は統計資料がない。白粋のみで白紙の場合は以下同じ。

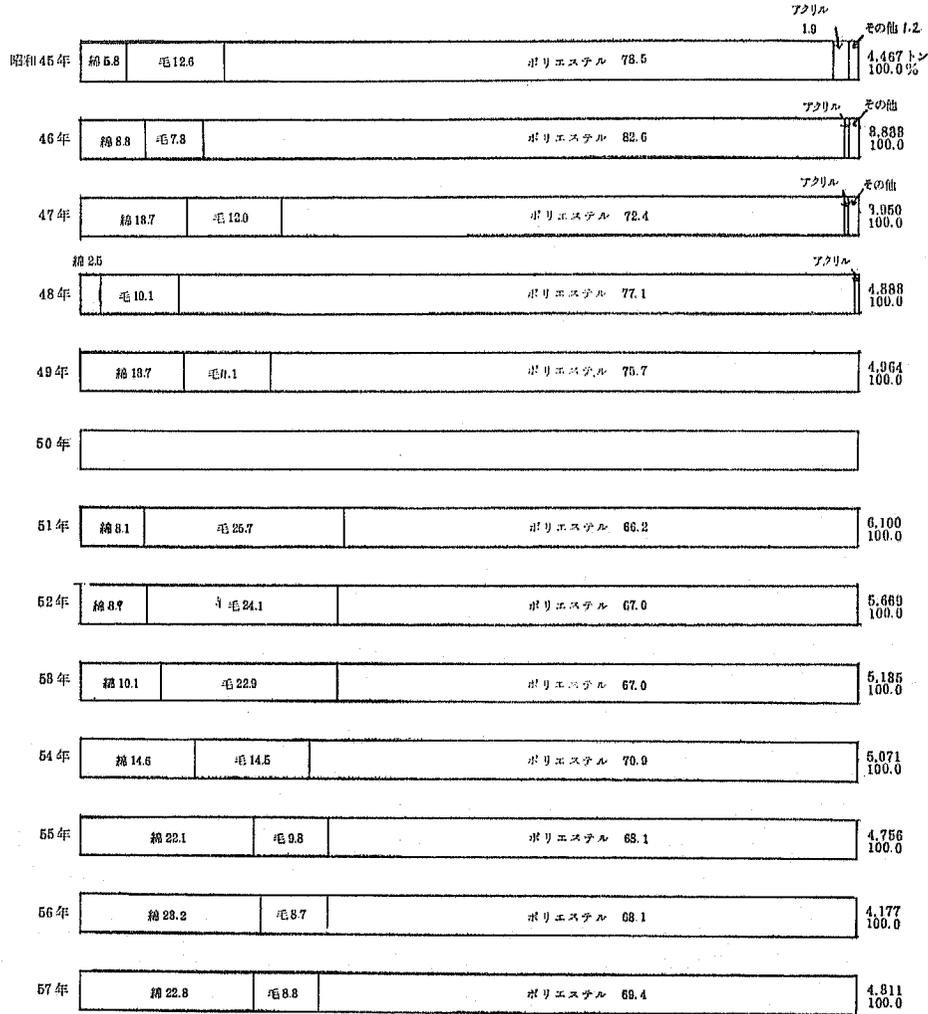
が主体であるということである。

さらに、昭和45年から同47年までは、毛(47~49%) > ポリエステル(38~39%)であったのが、同48年から同53年まで、毛(40%前後) = ポリエステル(40%前後)となり、同54年から同57年になると、毛とポリエステルが占める構成比が逆転して、毛(35%前後) < ポリエステル(43%前後)となってしまった。もう一つ興味ある現象は、天然繊維どうしの競合と考えられる毛と綿と構成比の変化である。昭和45年では毛が47.1%、綿が11.5%という構成比であったのが、同54年以降になると急に、毛が33%前後、綿が20%前後という構成比になり、綿が毛を侵食しているかのようにみられる。

このような事例からは、繊維競合現象が、必ずしも天然繊維と人造繊維との間で起こるのではなく、天然繊維間または、人造繊維間で起こるのではないかと考えられる。たとえば人造繊維間でも昭和50年において、折角レーヨン、ナイロンが出て、それ以降はポリエステルに押されてか姿を消してしまったといつてよいほど構成比は小さい値になってしまっている。

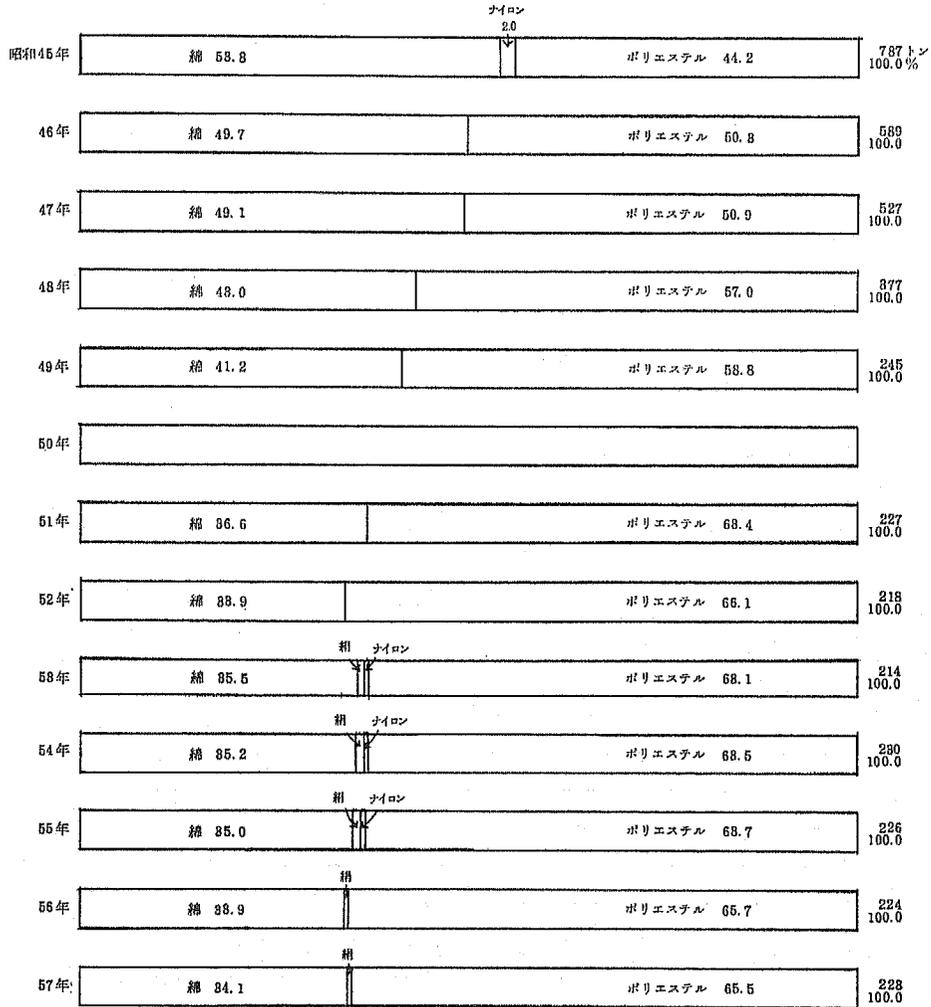
紳士用外衣について、さらに素材たる繊維の競合関係を深くみつめるために、代表的な外衣のオーバーコート、トップコート、レインコート、背広(上、下)、及び学生服(上、下)について考察してみる。

(イ) オーバーコートは、第1表からわかるとおり昭和45年と同57年との期間はまったく毛ばかりであり、第6図からも昭和43年と同44年とが人造繊維が20~25%の割合を示していたが、同45年からは全然姿を消してしまった。(ロ) トップコートは、第1表より、昭和45年と同57年との差は、綿が16.4%も増加し、絹(+0.1%)も僅か増したのに対し、天然繊維の毛(-4.3%)と人造繊維のポリエステル(-9.1%)とアクリル(-1.9%)が減少している。したがって、トップコートでは天然繊維の綿が、同じ天然繊維の毛と人造繊維に代替したとみてよい。第7図の昭和45年から同57年までのトップコートの繊維別消費構成比の推移からわかるように、昭和45年から同49年まではポリエステルが圧倒的に多かったが、同50年から同53年までの間は毛がポリエステルを侵食し、さらに同54年から同57年にかけては、綿が同じ天然繊維の毛や人造繊維のポリエステルに代替している。(ハ) レインコートは、第1表からは綿が19.7%も同45年と同57年との間において減少したのに対し、同じ期間ポリエステルが21.3%も増加しているところから推察するに、レインコートでは天然繊維が人造繊維に敗退したことを示すものである。この天然繊維の綿の敗退の様相は第8図からわかるように、昭和46年頃からポリエステルが綿を侵食し、同52年まで急激にポリエステルが綿を押しまくっているが、同53年から同57年までは停滞している。(ニ) 背広(上、下)は、第9図から明らかのように、昭和43年から同57年の間終始人造繊維のポリエステルが、天然繊維の毛を圧倒的に代替して、競争に打ちかっている。このように、天然繊維が人造繊維にきれいな形で敗退しつつある傾向は珍らしいといえる。(ホ) 最後に学生服(上、下)をとってみると、第10図から明白なように、これも背広(上、下)と同様、典型的な形で、昭和43年から同57年に至る間人造繊維のポリエステルが天然繊維の毛と逐次代替している。背広(上、下)と異なる点は、背広(上、下)の主体が毛であったのが、この学生服(上、下)ではポリエステルが75~95



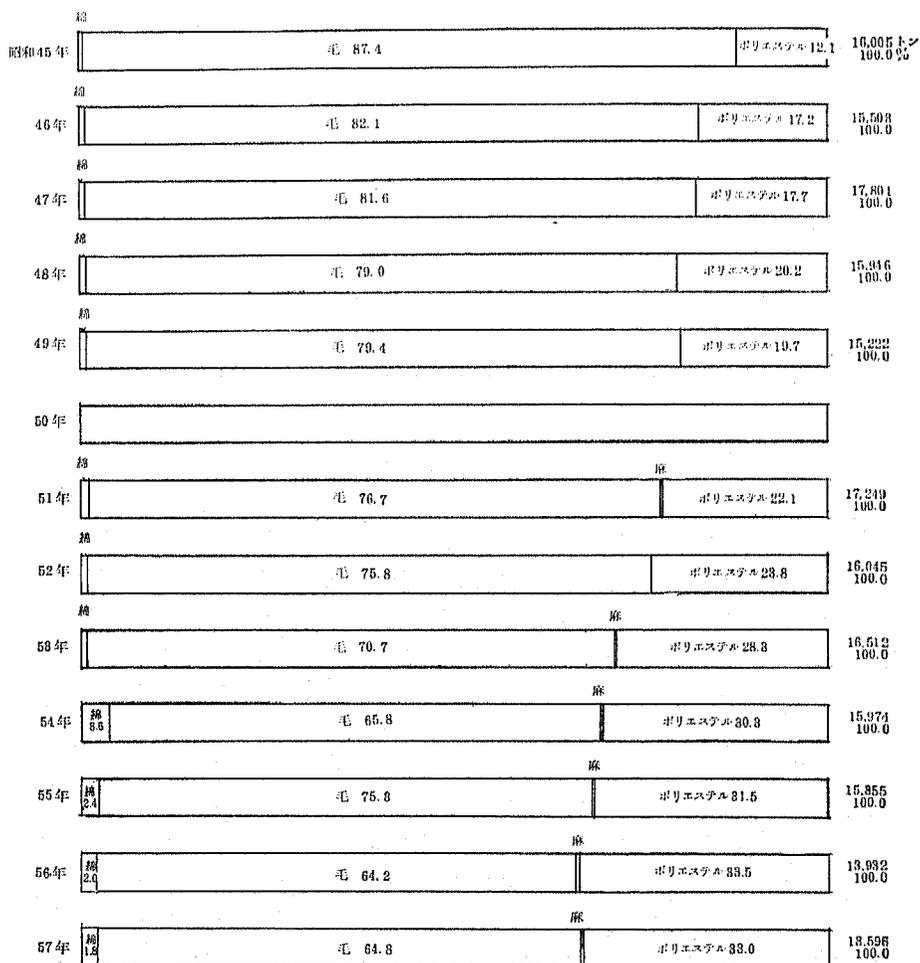
第7図 紳士用外衣（トップコート）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内着衣料用及び家庭用（繊維・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第8図 紳士用外衣(レインコート)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第9図 紳士用外衣（背広：上，下）用繊維別消費量構成比の推移

（注）日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

昭和45年	毛 24.8	ポリエステル 75.2	2,882トン 100.0%
46年	毛 23.1	ポリエステル 76.9	2,537 100.0
47年	毛 24.0	ポリエステル 76.0	2,736 100.0
48年	毛 22.5	ポリエステル 77.5	2,609 100.0
49年	毛 22.7	ポリエステル 77.9	2,081 100.0
50年			
51年	毛 21.2	ポリエステル 78.8	2,220 100.0
52年	毛 19.4	ポリエステル 80.6	2,298 100.0
53年	毛 17.9	ポリエステル 82.1	2,475 100.0
54年	毛 16.3	ポリエステル 83.7	2,729 100.0
55年	毛 11.0	ポリエステル 89.0	2,843 100.0
56年	毛 6.7	ポリエステル 93.3	2,709 100.0
57年	毛 5.4	ポリエステル 94.6	2,760 100.0

第10図 紳士用外衣(学生服:上,下)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

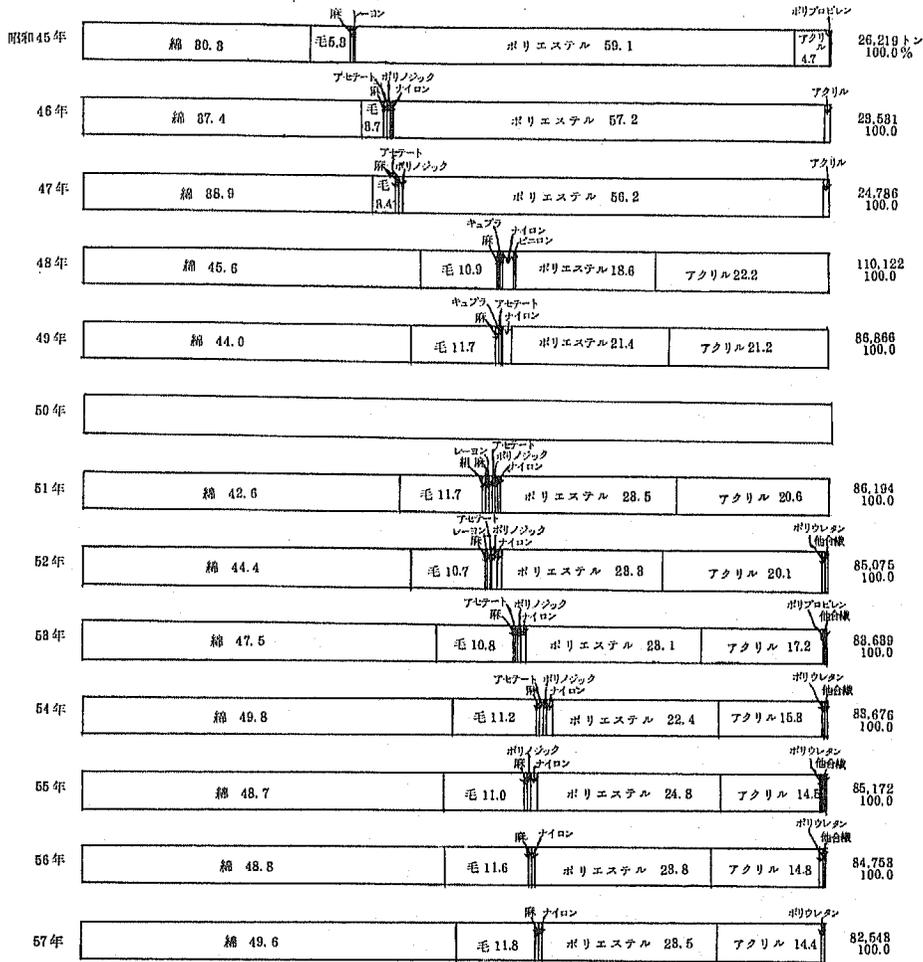
％も占めていることである。やはり学生服（上、下）は「安くて丈夫」という品質と価格の面から人造繊維（ポリエステル）が多く消費されているとみてよい。以上代表的な紳士用外衣をみてきたところ、オーバーコートは除き、他の商品は比率の大小はあるものの、ほぼ、人造繊維が天然繊維に代替しつつあると考えられる。

② 紳士用中衣

紳士用中衣の繊維競合関係は、第1表によってうかがうと、天然繊維の綿が昭和45年から同57年との間に、構成比で19.3％増加し、さらに毛も6.5％増しているのに対し、同じ期間、人造繊維のポリエステルが35.6％、レーヨンが0.2％、ポリプロピレンが0.1％、とそれぞれ構成比において減少している。このような現象から、この期間では天然繊維が人造繊維に競争的に勝っていったとみられる。この繊維競合関係の推移を探るために、中衣の繊維別構成比の流れを第11図で示すと、昭和45年にポリエステルの構成比が59.1％もあったのが、逐次年を経るにしたがい減少し、同48年にはポリエステルは18.6％と激減し、その代りに、綿（+45.6％）、アクリル（+22.7％）、毛（+10.9％）が出たが、ポリエステルは天然繊維と人造繊維にはさみ打ちに合ったような形で漸減傾向となっている。

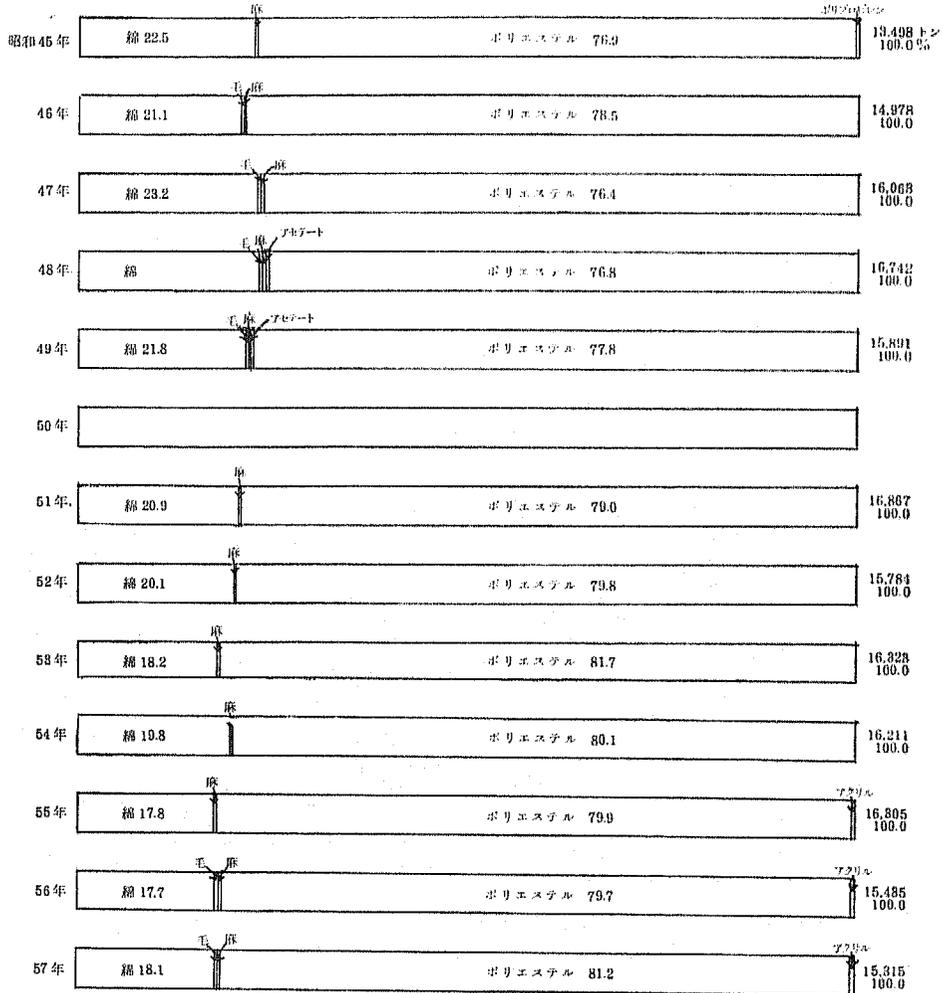
このような紳士中衣の繊維競合関係を深く考えるために、紳士用外衣の事例と同じように、5品目、ドレスシャツ、スポーツシャツ、セーター類、肌着、中間衣（チョッキ、ベスト、カーディガン等）について繊維の使用構成比をみることにする。

(イ) ドレスシャツの繊維素材別構成比から繊維競合関係をうかがうべく第1表をみると、特徴的な点は昭和45年と同57年との差が天然繊維の綿が構成比4.4％減少したのに対し、人造繊維のポリエステルがほぼ同じ構成比4.3％増加していることである。したがって、大数観察的にいえば、天然繊維が人造繊維によって代替されたのである。この様相を詳細にみるため昭和45年から同57年までの繊維別構成比の推移をうかがえる第12図を描くと、この期間中70～80％がポリエステルの占める比率であり、しかも少しずつではあるが、天然繊維の綿を圧倒していることがわかる。(ロ) スポーツシャツは第1表から明らかなように、昭和45年と同57年との差は綿が21.1％も増えたのに対し、アクリル3.3％、ポリエステル1.1％、ナイロン0.2％減少しているもので、天然繊維が圧倒的に人造繊維に勝っているといえる。この点について長期的な視野から繊維間競合をみるため、第13図を描いてみると、綿が逐次昭和45年から同57年までの間ポリエステルを侵食していることがよくわかる。(ハ) セーター類も、ほぼスポーツシャツと同様な動きであることが、第1表の昭和45年と同57年との繊維間構成比の差からよくわかる。すなわち、毛（+5.0％）、綿（+3.4％）が増加し、それに対しアクリルが7.3％も減少している。具体的な内容をうかがうために、セーター類の繊維別消費量構成比について昭和48年から同57年までの推移をみると、第14図のとおりである。昭和48年において毛35.0％、アクリル45.5％であったのが、年を経るにしたがって毛がアクリルを押して、遂に同57年には毛40.0％、アクリル38.2％と逆転してしまった。(ニ) 紳士用中衣の肌着についてみるため、昭和43年から同57年までの肌着用繊維別消費量構成比の推移を描くと第15図のごとくである。昭和48年以降綿が60～67％の範囲の構成比で、ポリエステルが15.9～38.7％の間で推移し、両者が僅かずつ互に侵食し合いつつ推移している。総括すれば、肌着で



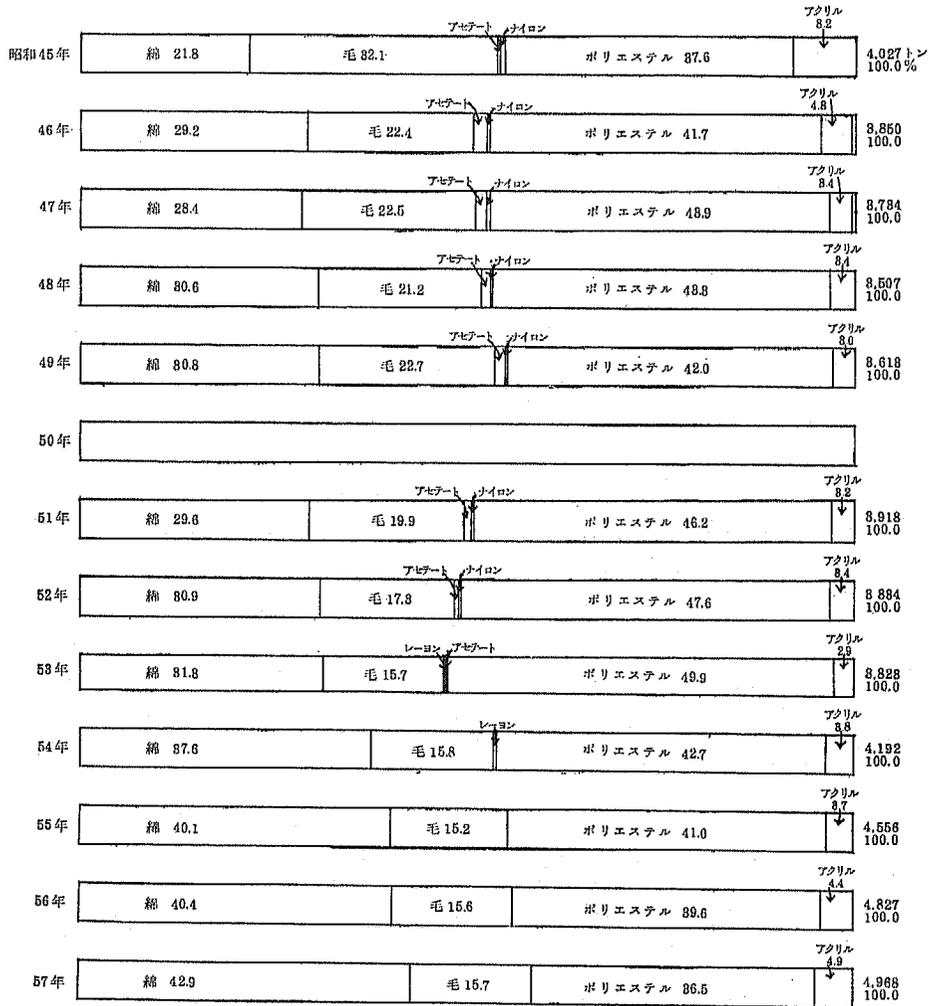
第11図 紳士用中衣の繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



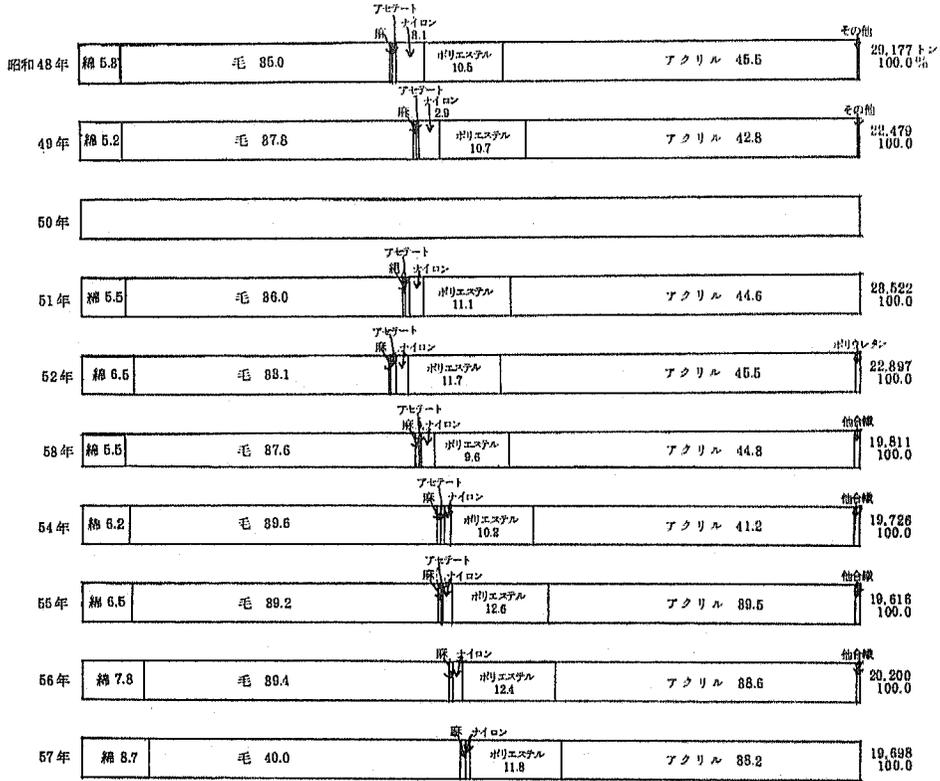
第12図 紳士用中衣（ドレスシャツ）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第13図 紳士用中衣(スポーツシャツ)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内着衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



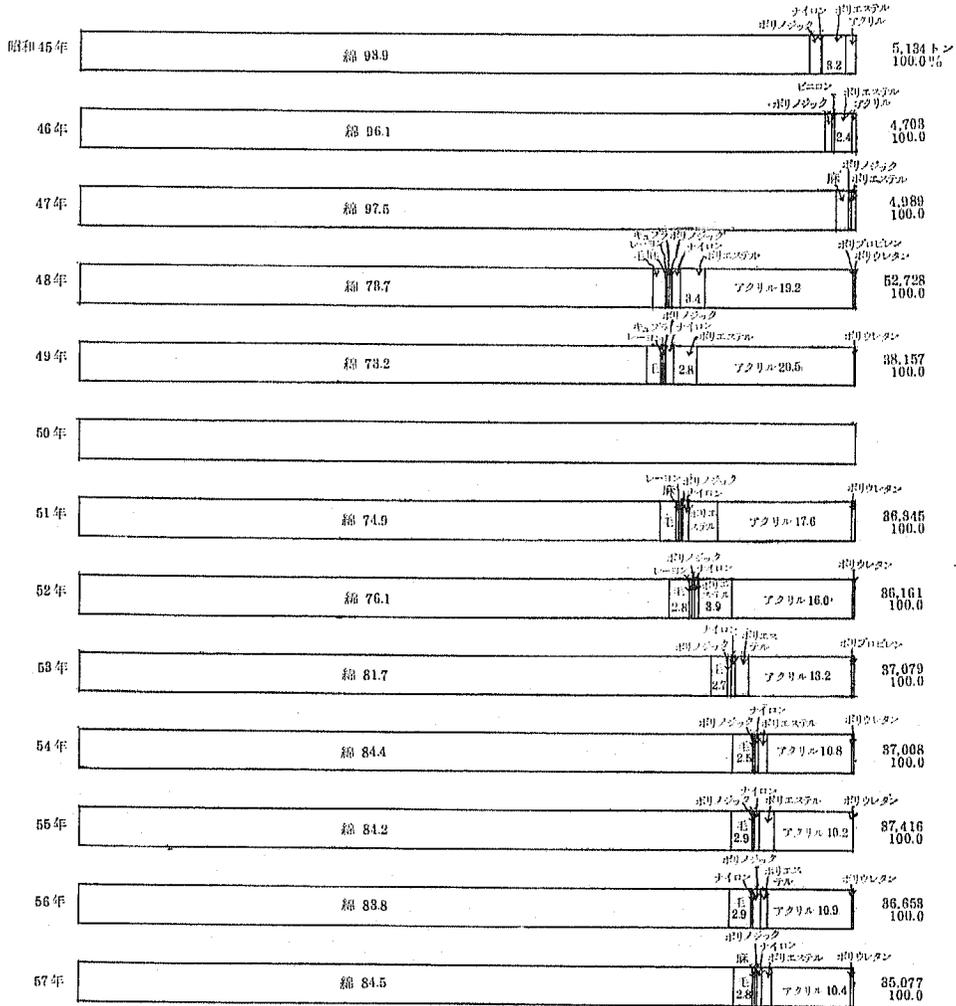
第14図 紳士用中衣（セーター類）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

は、天然繊維が人造繊維を競合上負かしているといえよう。(ii)最後の紳士用中衣としての中間衣をみると、第16図のとおりであって、昭和48年以降同57年まで綿が60%前後の比率を占めてはいるものの、同55年以降からはポリエステルが急激にふえ、人造繊維が天然繊維に対し攻勢に出ているといえる。

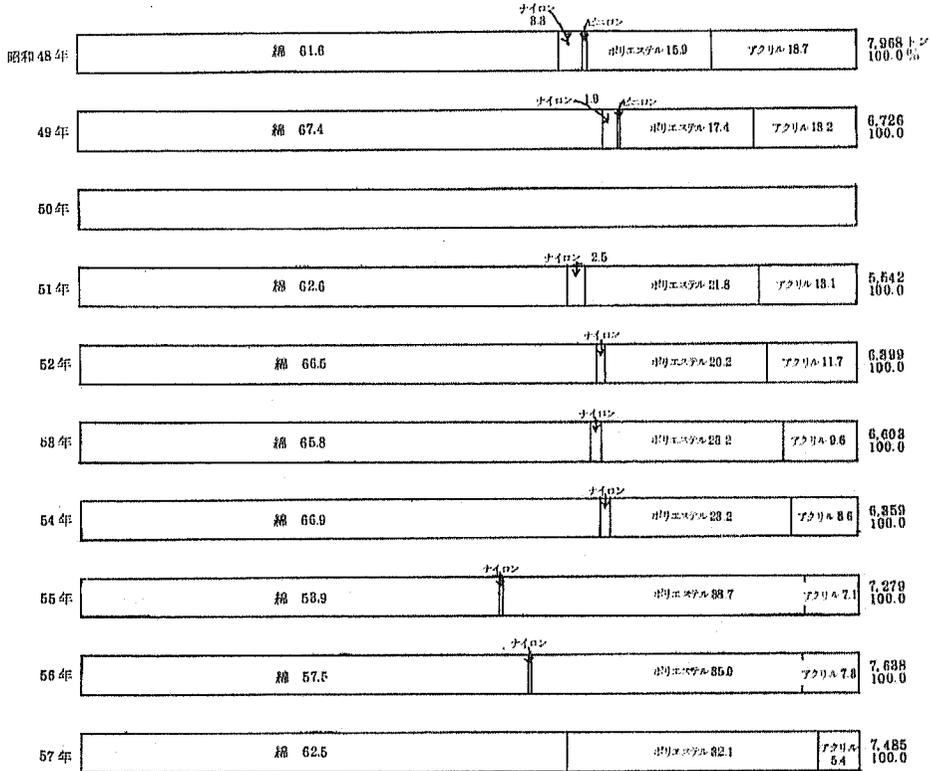
(i) 婦人用衣料型

婦人用衣料について繊維競合を考察していく場合、婦人用外衣と中衣とに分けて分析する。まず、婦人用外衣の内容をみることから始めよう。



第15図 紳士用中衣(肌着)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第16図 紳士用中衣（中間衣）用繊維別消費量構成比の推移

（注）日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。中間衣とは、チョッキ、ベスト、カーディガン類を指す。

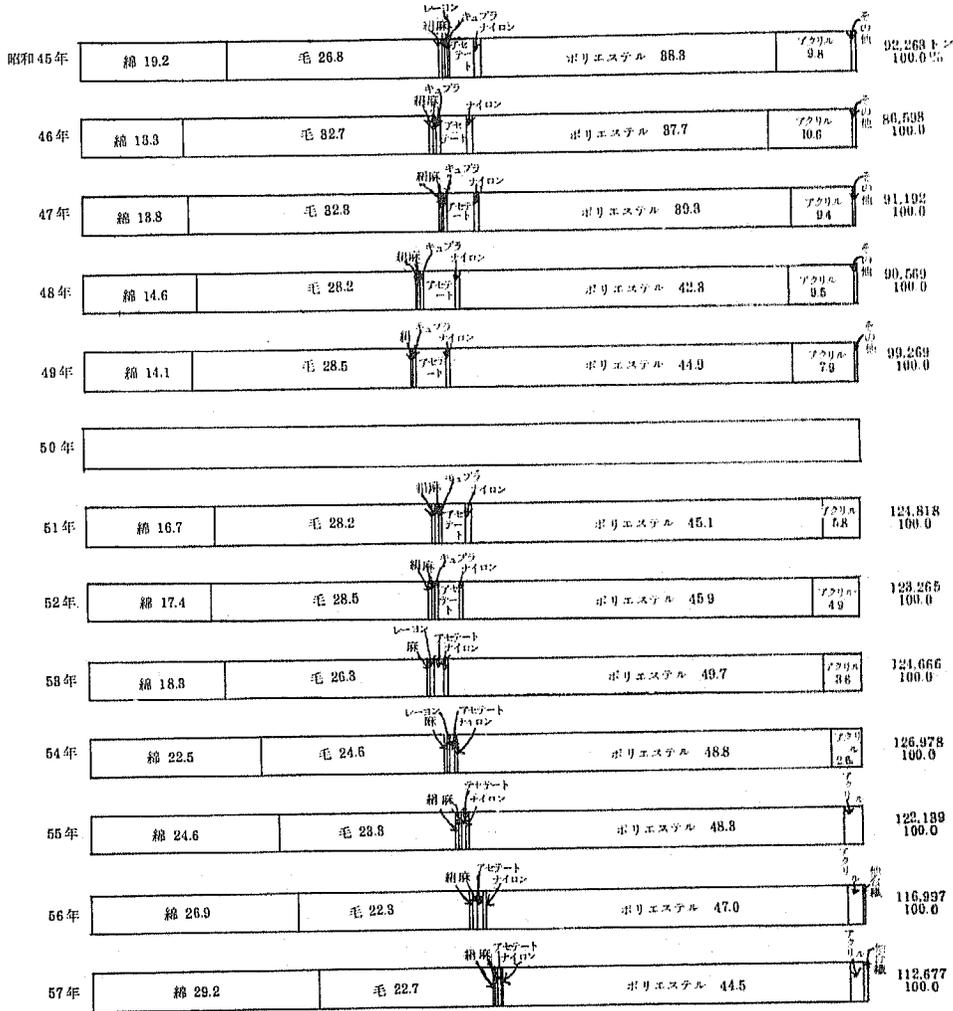
① 婦人用外衣

最初婦人用外衣について、昭和45年と同57年との繊維別消費量構成比の比較をしてある第2表をみると、天然繊維では綿(+10.0%)と麻(+0.2%)が増え、毛(-4.1%)が減少し、人造繊維ではポリエステル(+6.2%)と「その他」合成繊維(+0.4%)が増え、アクリル(-7.8%)とナイロン(-0.9%)とが減少している。したがってこの繊維間競争関係は複雑である。そこで、婦人用外衣の昭和45年から同57年までの繊維別消費量構成比の推移を描いた第17図をもあわせて考えることとする。この図から明らかのように、

第2表 日本における婦人用衣料の各種繊維消費量構成比の変化 (%)

用途 年次 (昭和)	天然繊維				人造纖維				再生産合成纖維				織成				織維				その他						
	合計	綿	毛	絹	麻	合計	レーヨン	ケム ファイ ブ	アセテ ート 繊維	リノジ ック	合計	ナイ ロン	ピニ ロン	ポリ ステル	アクリ ル	ビニ ル	ポリ ビニ ル	ポリ エス テル	ポリ ビニ ル	ポリ ビニ ル	ポリ ビニ ル	ポリ ビニ ル	ポリ ビニ ル	ポリ ビニ ル	合計	他 繊維	
																											合計
婦人用 外衣	45年	46.2	19.2	26.8	0.1	0.1	4.0	0.1	0.3	3.6	0	49.3	1.1	0	38.3	9.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5
	57年	52.3 +6.1	29.2 +10.0	22.7 -4.1	0.1 +0.2	0.3 +0.2	0.7 -3.3	0 -0.1	0 -0.3	0.7 -2.9	0 0	47.0 -2.3	0.2 -0.7	0 0	44.5 +6.2	2.0 -7.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.4 -0.5
婦人用 中衣	45年	32.0	30.2	1.6	0.1	0.1	2.1	0.1	0.2	1.8	0	64.8	0.7	0	58.0	6.1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.1	
	57年	49.5 +17.5	28.5 -1.7	20.5 +18.9	0.1 +0.3	0.4 +0.3	2.3 +0.2	0 -0.1	1.2 +1.0	0.5 -1.2	0.5 +0.5	48.2 -16.6	10.4 +9.7	0	17.0 -41.0	19.0 +12.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.1 -1.1
婦人用外 表:オニ ゴ コート	45年	95.6	0	95.6	0	0	0	0	0	0	4.4	0	0	2.1	2.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	57年	100.0 +4.4	0 +0.2	99.8 +4.2	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4.4 -4.4	0 0	0 0	2.1 -2.3	2.3 -2.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
婦人用外 表:トッ プ コート	45年	29.5	19.8	9.7	0	0	1.8	0	1.8	0	68.6	0.3	0	50.1	18.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.1	
	57年	37.6 +8.1	33.3 +13.5	4.3 -5.4	0	0	0	0	0	0	0	62.4 -6.2	0	0	62.3 +12.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
婦人用外 表:レイ ン コート	45年	34.9	34.5	0.4	0	0	0	0	0	0	61.0	2.7	0	58.4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4.1	
	57年	20.4 -14.5	20.4 -14.1	0	0	0	0	0	0	0	0	16.5 +13.8	0	0	63.1 +4.7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
婦人用中 表:ブラ ウス・シ ン ス ワス	45年	29.5	27.0	2.3	0.2	0.1	2.7	0	0.3	2.4	66.3	0.5	0	57.3	8.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1.5	
	57年	37.0 +7.5	36.0 +9.0	0.4 -1.9	0.5 +0.3	0.1 -0.1	0.1 -2.6	0	0	0.1	0.1	62.9 -3.4	0	0	60.7 +3.4	1.9 -6.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
婦人用中 表:セー ター ズ	45年	42.9	4.5	38.5	0	0	1.6	0	1.6	0	55.4	1.9	0	6.0	47.5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.1	
	57年	55.9 +13.0	7.4 +2.9	47.5 +9.0	0 +1.0	0 +1.0	0.6 -0.6	0	0	0	0	43.1 +12.3	0.5 -1.4	0	5.3 -0.7	37.3 -10.2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
婦人用中 表:肌 着	45年	80.0	80.0	0	0	0	8.9	1.7	0	0	10.3	2.4	0.2	4.7	3.0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.8	
	57年	70.5 -9.5	68.5 -11.5	2.0 +2.0	0	0	2.8 -6.1	0	0	0.2 +0.2	2.6 -4.6	26.7 +16.4	9.2 +6.8	0	1.8 -2.9	13.8 +10.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.1 -0.8

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の昭和45年と同57年のものにより作成。



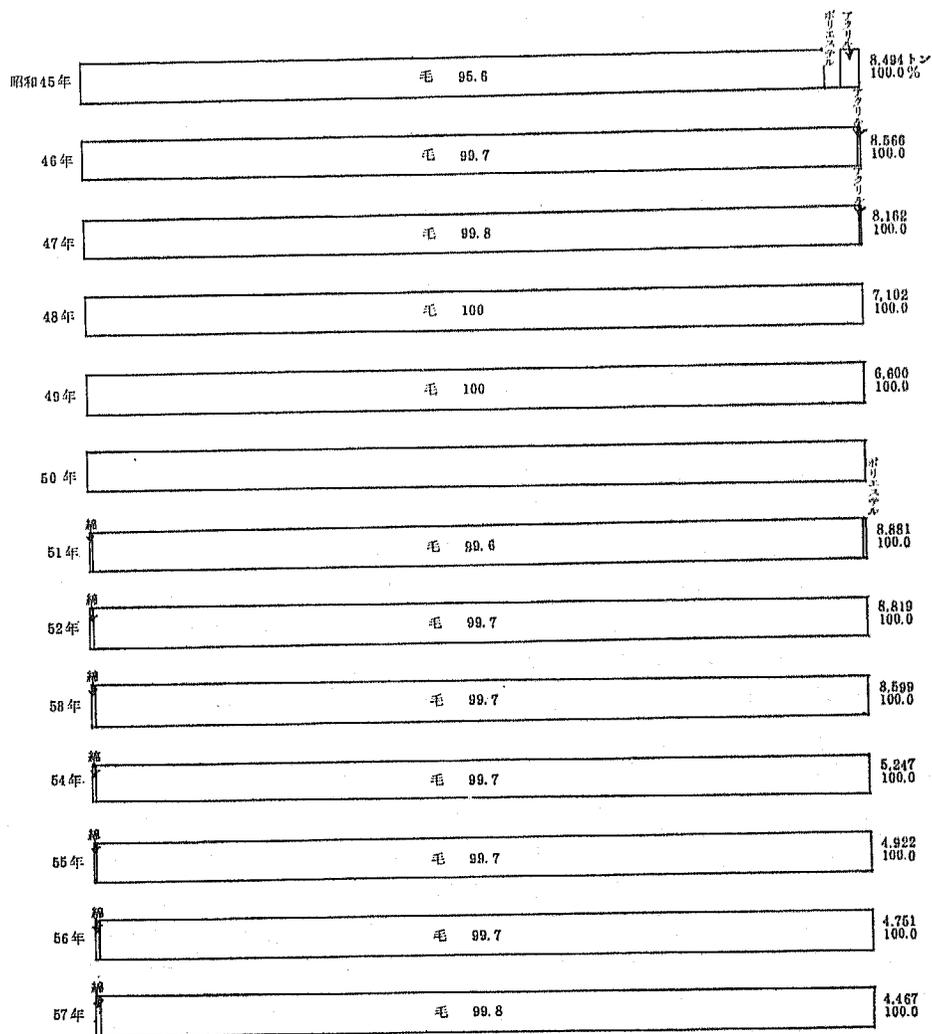
第17図 婦人用外衣の繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

この期間、ポリエステルが約37%から約49.9%の範囲の構成比であり、その他の繊維に比すれば、圧倒的に大きい比率である。確かに年次が降るにつれて綿がポリエステルの増加比率より大きいけれども、絶対値では綿はポリエステルにはとても及ばない。

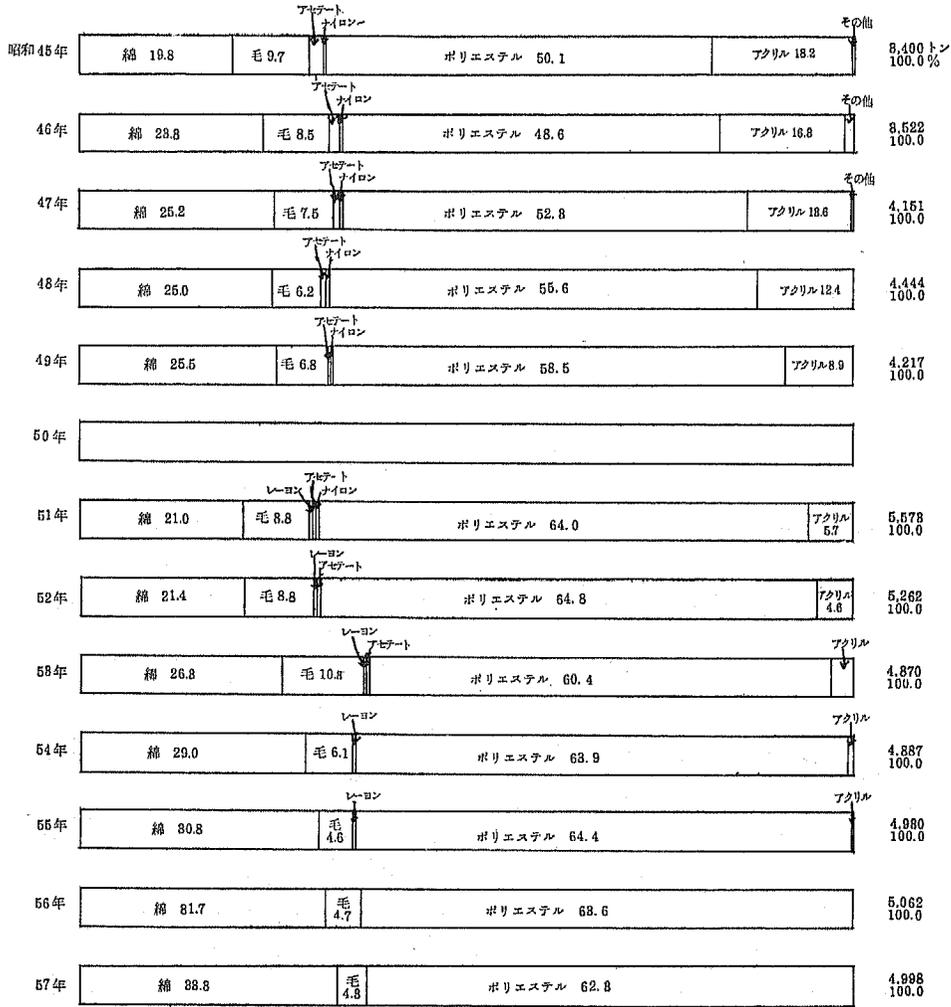
いま、婦人用外衣の繊維間競合の実態をもっと明らかにするために、この外衣の5種類、オーバーコート、トップコート、レインコート、スーツ・ワンピース及びスカートについて詳細な繊維別消費量構成比の昭和45年から同57年までの推移を描いた図を用いて、繊維間競合の状況を考察してみることにする。

(イ)オーバーコートは、第18図によれば毛が95~100%の割合を占め、ほとんど天然繊維と人造繊維との競合が、この期間にみられない。(ロ)トップコートは、第19図から明らかのようにポリエステルが昭和45年の50.1%の構成比から逡増して同57年には62.3%にもなり、トップコートの繊維は人造繊維であるといつてよい。天然繊維では、綿が昭和45年に19.8%であったのが同57年には33.3%と増加している。結局、第2表と第19図とをあわせて考えると、綿とポリエステルが増加し、それに反し毛、アクリル及びナイロンが減少している。かくて、トップコートは天然繊維相互の綿と毛、人造繊維相互のポリエステルとアクリルとの競合であるといふことができる。(ハ)レインコートは、綿(-14.1%)と毛(-0.4%)の両者が昭和45年と同57年との構成比の比較では下がり、他方、ナイロン(+13.8%)とポリエステル(+4.7%)が増加している。これだけからすると、天然繊維の代りに人造繊維が使用されてレインコートが作られているようにかがわれる。果たして、この推論のとおりかどうかについて詳細をみるため、昭和45年から同57年までのレインコート用繊維別消費量構成比の推移を第20図のように描いた。このレインコートでは第20図でわかるごとく、昭和45年から同49年まではポリエステルが圧倒的な比率を占め58~68%で過半数の構成比であったが、同51年からはナイロンがポリエステルと綿の領域を侵して構成比を大きくしている。昭和57年にはまたポリエステルが挽回して綿、ナイロンを侵食して63.1%となり、綿(20.4%)もナイロン(16.5%)も小さな値の構成比になってしまった。(ニ)スーツ・ワンピースでは、昭和45年から同57年までの繊維別消費量構成比の推移を第21図に描いて競合関係をみた。その結果、第21図から明らかのように、昭和45年から同53年まではポリエステルが41.2%から62.5%までに構成比が伸びているが、これはポリエステルが天然繊維の綿や毛と人造繊維のアクリルの領域を侵したためと感得される。ところが昭和54年から同57年までの間に綿が挽回し、人造繊維のポリエステルやアクリルを侵食しはじめていることが第21図からよくわかる。(ホ)最後に、婦人用スカートの素材である繊維の競合関係をうかがうべく、他の商品と同様、昭和45年から同57年までの繊維別消費量構成比の推移について図示すると第22図のようになる。昭和45年において、消費量構成比が天然繊維において綿12.5%、毛25.6%であり、人造繊維の主なものはポリエステル49.3%、アクリル11.9%であったが、綿が漸次増加し、毛はほとんど変化せず、ポリエステルは昭和52年アクリルを侵食して51.7%となったが、その翌年以降から逡減傾向となり、昭和57年には39.3%にも落ちこんでしまった。このスカートでは、次第に最近になるにしたがい天然繊維の綿が人造繊維のポリエステルやアクリルを侵食したと考えてよからう。



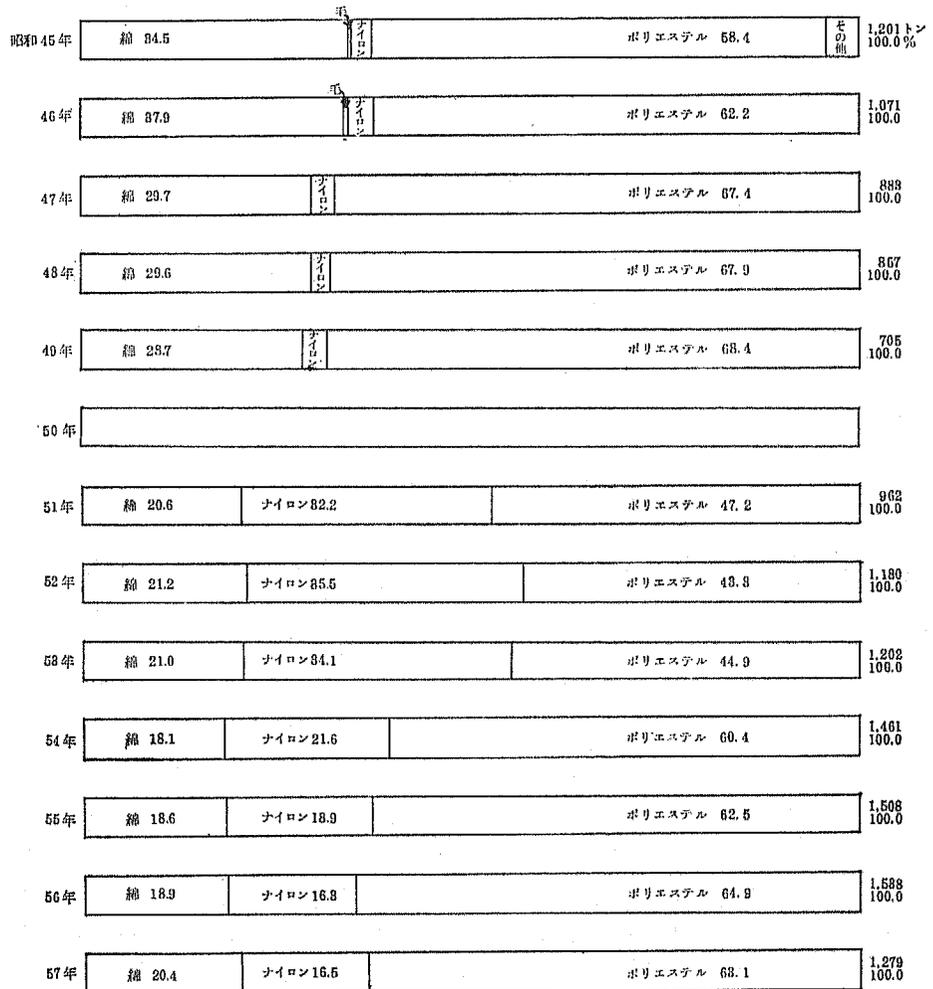
第18図 婦人用外衣（オーバーコート）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



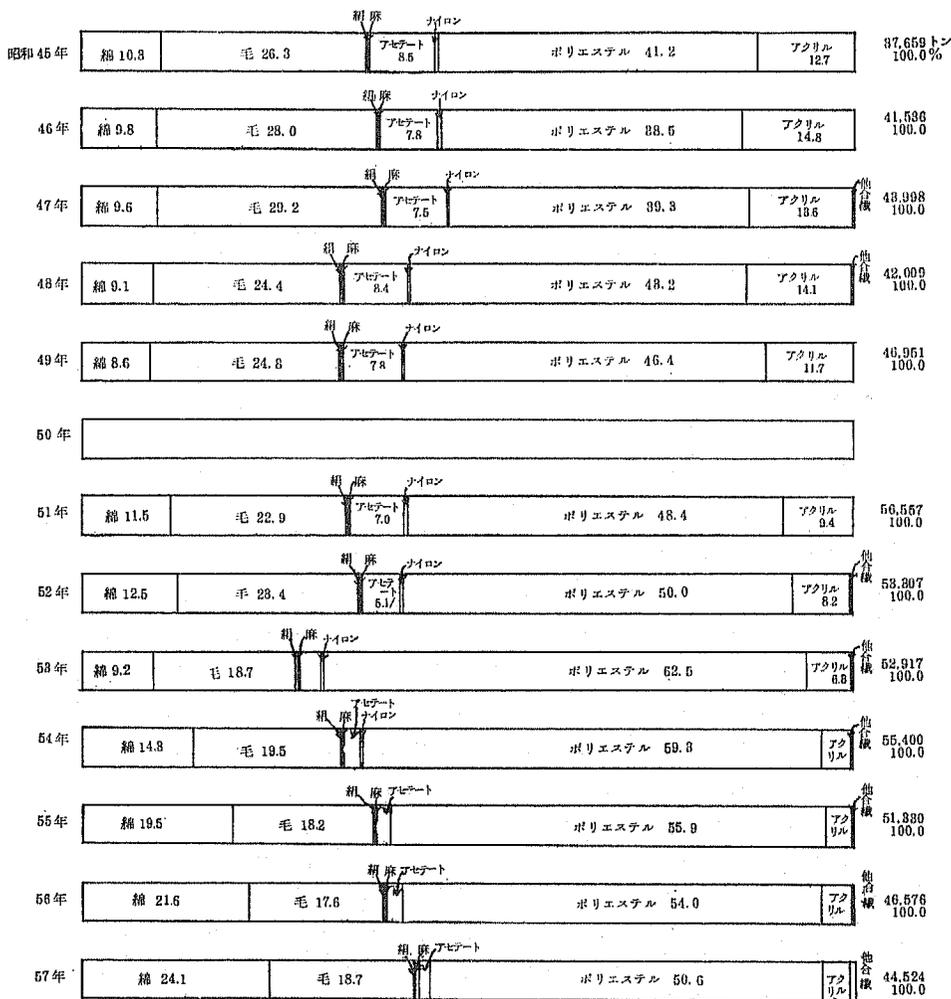
第19図 婦人用外衣（トップコート）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（繊維・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



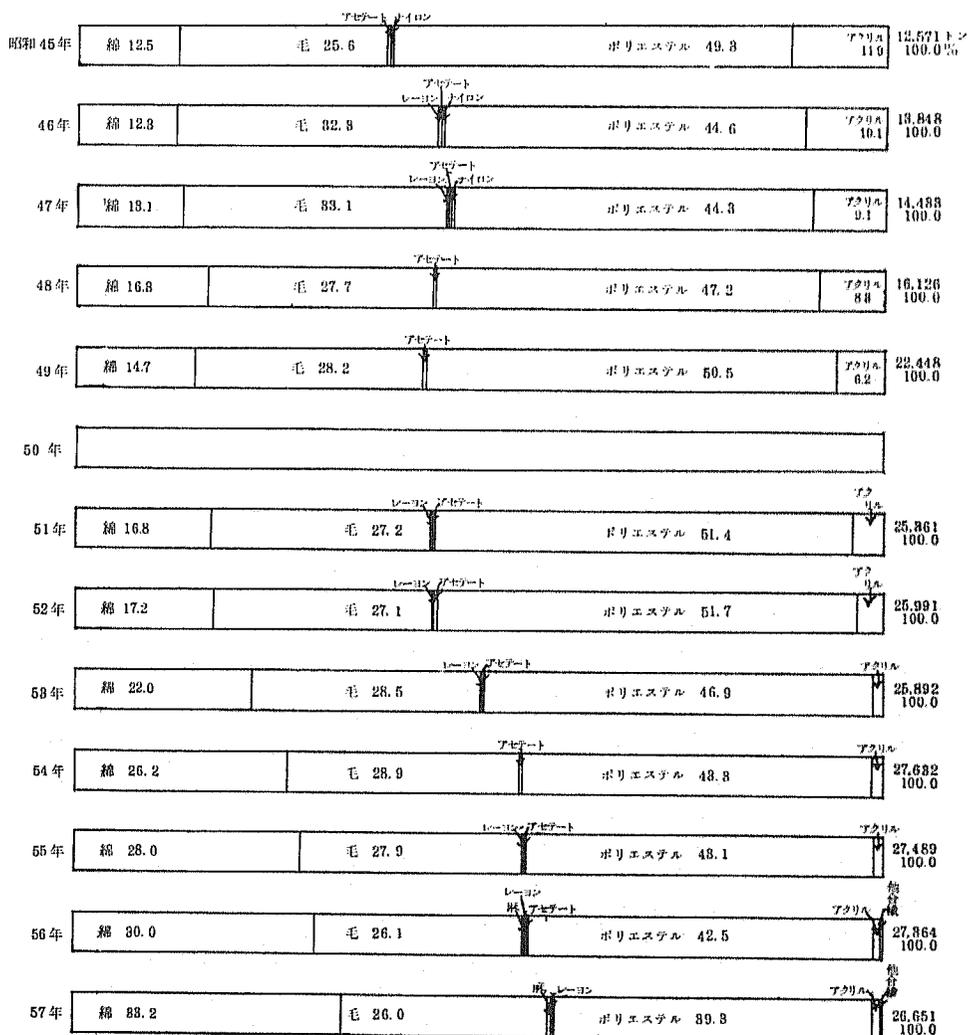
第20図 婦人用外衣（レインコート）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第21図 婦人用外衣(スーツ・ワンピース)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



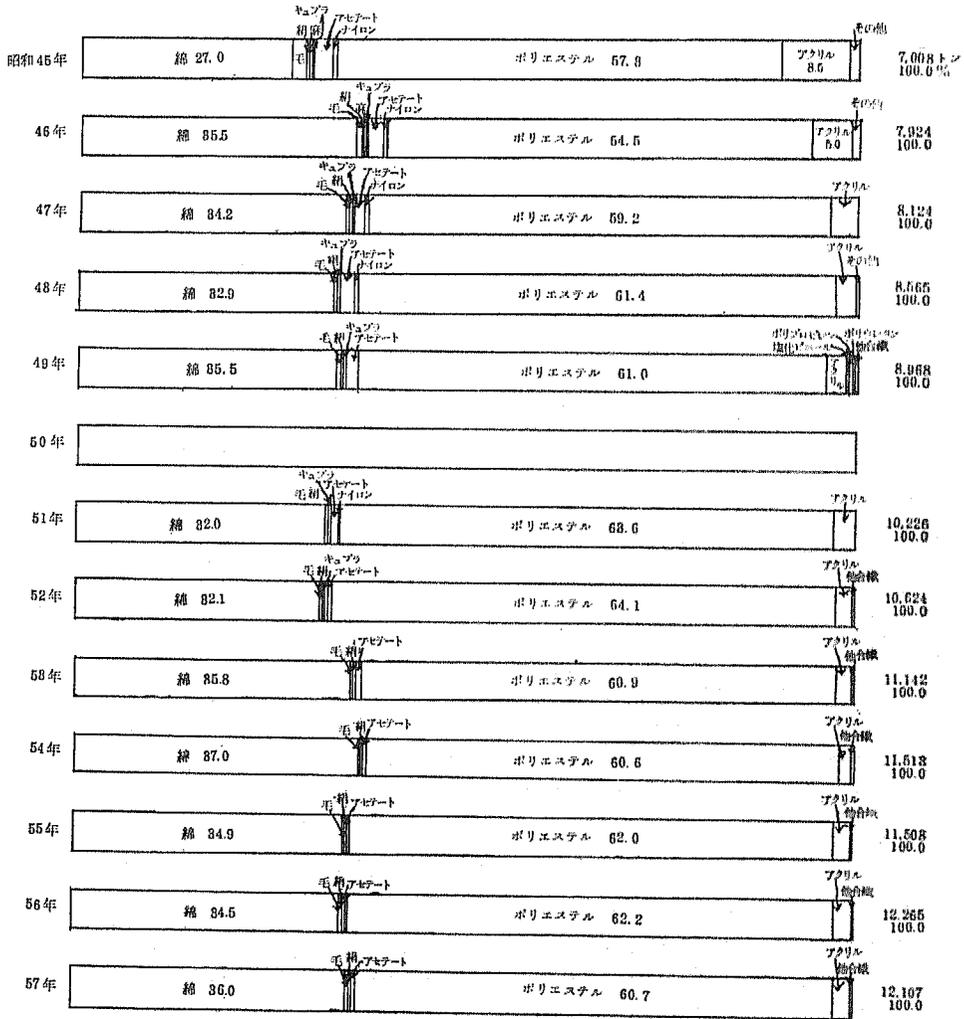
第22図 婦人用外衣（スカート）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

② 婦人用中衣

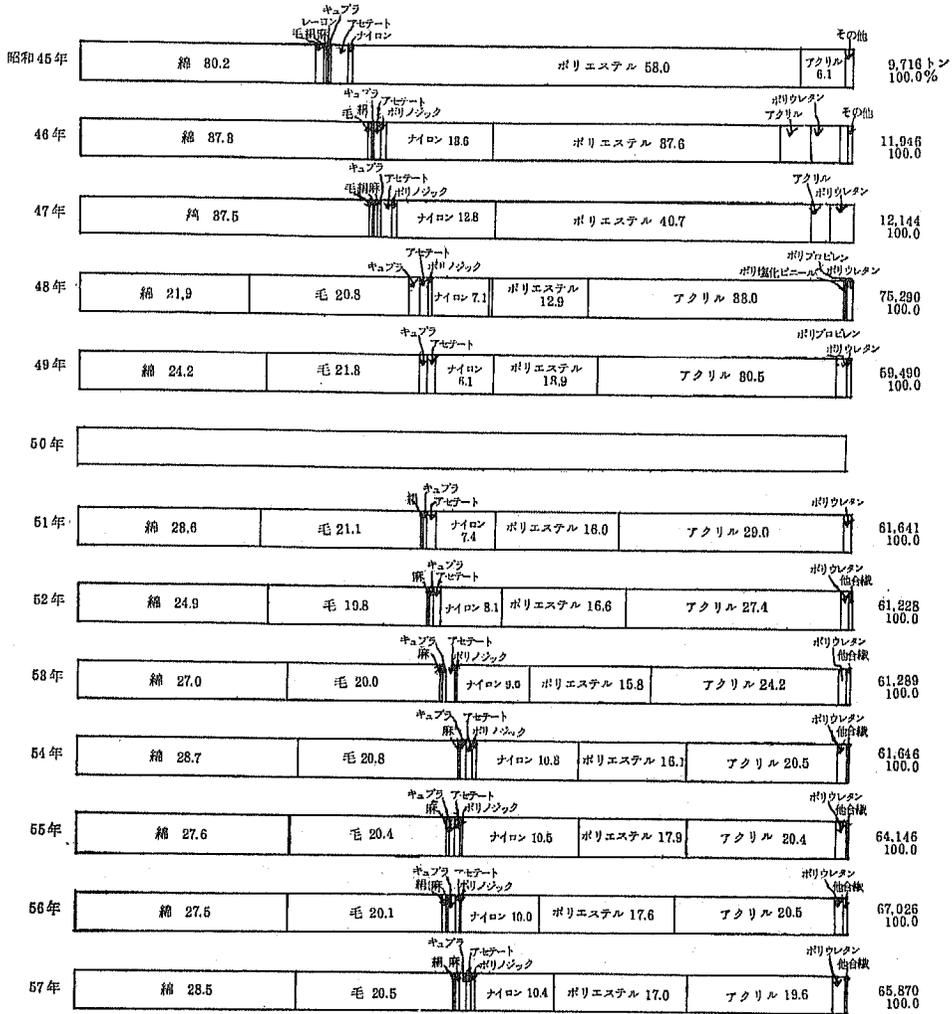
婦人用中衣の繊維間競合の状況を、まず第2表の昭和45年と同57年の繊維消費量構成比の差をみると、天然繊維では毛が18.9%も増えたのみで、麻(-10.3%)、綿(-1.7%)それぞれが減少しており、人造繊維では、ポリエステルが41.0%も減少し、ナイロン(+9.7%)、アクリル(+12.9%)、ポリウレタン(+1.7%)、「その他」合成繊維(+0.1%)がそれぞれ増加している。この婦人用中衣の繊維競合関係の考察を深めるため、昭和45年から同57年までの繊維消費量構成比の推移を描いた第23図を観察すると、確かにポリエステルが昭和45年において58.0%であったのが、同57年には17.0%にまで落ち込み、ナイロンやアクリルもほぼ同じような比率となっている。天然繊維では綿も昭和48年から同じ天然繊維の毛に食われ、綿と毛とが約20%前後の比率のまま同57年まで推移している。どちらかという、婦人用中衣のための繊維は、天然繊維相互、人造繊維相互の競合関係にあるものとみてよい。

さらに、婦人用中衣の5品目、ブラウス・シャツブラウス、セーター類、肌着、ブラジャー、ファンデーション・その他を挙げて、これらの商品の繊維競合関係をみて、大分類的にみてきた状況を深くみつめてみよう。(i)ブラウス・シャツブラウスは、天然繊維では、綿が構成比自体は小さいが、昭和45年と同57年との間では90%増え、絹もほんの僅かではあるが0.3%増加していることが第2表からうかがえる。また同じ第2表からポリエステルが昭和45年以降構成比が大きな値を占め、同57年との比較では3.4%の増加となっているほか、人造繊維ではナイロン(-0.5%)、アクリル(-6.6%)が減少し、その他合成繊維は0.2%増加ではあるが無視してよいほど小さい構成比である。このような現象からは天然繊維の綿が毛を侵食し、人造繊維ではポリエステルがアクリル、ナイロンを侵食したと考えられる。このことは、第24図のブラウス・シャツブラウス用繊維別消費量構成比の昭和45年から同57年までの推移をみればより一層明らかとなる。(ii)セーター類は、第2表からわかるように、昭和45年と同57年との繊維別消費量の構成比の差は、この繊維素材の主体である毛とアクリルと丁度反対現象である。すなわち毛が9.0%増加したのに対し、アクリルが10.2%減少している。したがって、第25図の昭和45年から同57年までの繊維別消費量構成比の推移とあわせて考え、完全に、昭和45年以来逐次天然繊維の毛が人造繊維のアクリルを圧迫し、侵食したことが明らかである。(iii)肌着は、第2表からわかるように、綿が圧倒的に繊維別消費量構成比を占めているが、昭和45年から同57年まででは11.5%も減り、それに対し、人造繊維では構成比の高いナイロン、アクリルがこの期間伸びている。ここで肌着の昭和45年から同57年までの繊維別消費量構成比の推移を描いた第26図をあわせて考えると、確かに昭和45年は綿が断然高い比率を示していたが、昭和48年頃から次第にアクリル、ナイロンが進出し、同52年まで続いたが、この年次以降また綿がナイロンやアクリルを侵食し、同57年には綿が過半数の68.5%にも達している。(iv)ブラジャーは、第27図からわかるように、昭和45年に綿38.7%、ナイロン32.1%、ポリエステル25.7%で3者がほぼ同じ消費量構成であったのが、同53年から次第にナイロンとポリエステルが綿を圧迫し出し、遂に同57年には、綿17.2%、ナイロン37.8%、ポリエステル36.8%というように天然繊維は人造繊維に侵食されてしまったのである。(v)最後に、ファンデーション・そ



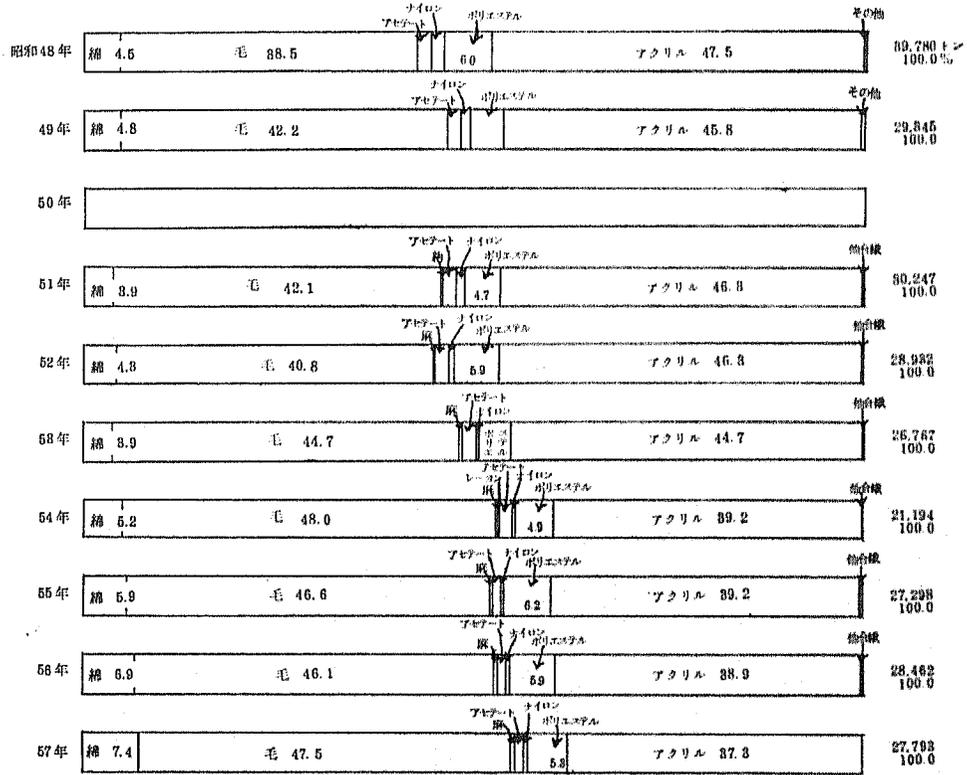
第24図 婦人用中衣の繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第23図 婦人用中衣(ブラウス・シャツブラウス)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(繊維・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

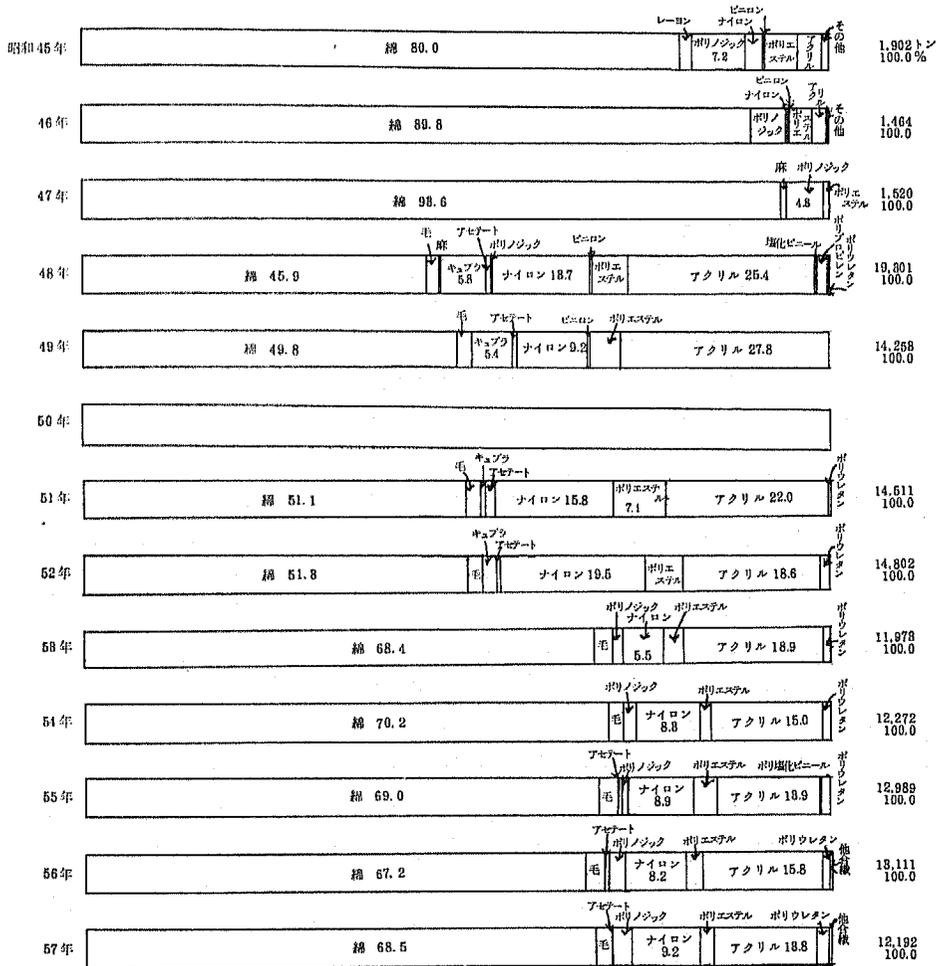


第25図 婦人用中衣（セーター類）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

のをうかがうと、第28図からわかるように、昭和45年から同52年まではナイロン（60%前後）＞綿（20%前後）＞ポリウレタン（15%前後）という順序の構成比であったが、同53年から同55年までナイロンが約76～78%も占め、綿、ポリウレタンを圧迫した。しかし、同56年以降は綿の回復とポリエステルに進出で、ナイロンは30%台に落ちこんでしまい、ファンデーション・その他の繊維競合状況は年とともにかなり変化したことがわかる。

以上、紳士用衣料型と婦人用衣料型の繊維競合状況をみたが、前者は天然繊維支配型、後者は人造繊維支配型の商品の多いことがわかった。



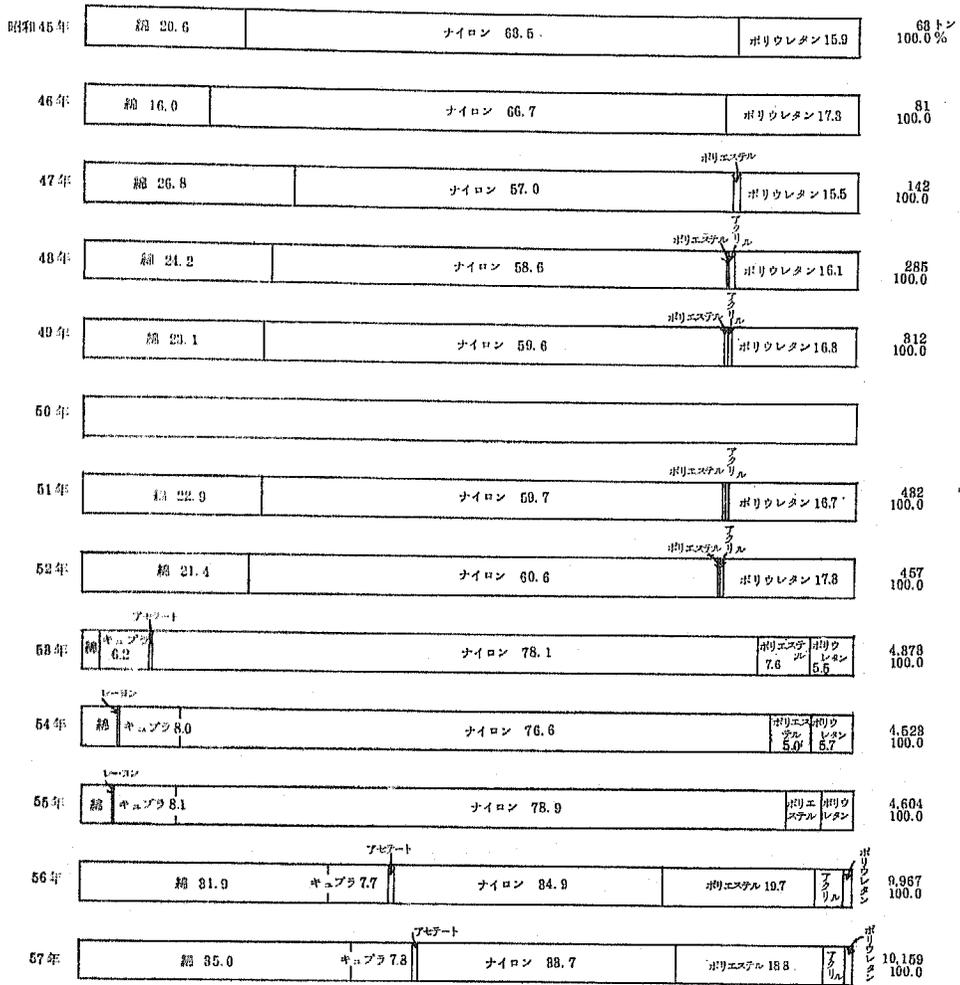
第26図 婦人用中衣(肌着)用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用(織物・編物)繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。

昭和45年	総 88.7	ナイロン 32.1	ポリエステル 25.7	その他 40.9	147 100.0
46年	総 43.9	ナイロン 28.0	ポリエステル 21.7	その他 14.2	167 100.0
47年	総 37.5	ナイロン 31.6	ポリエステル 23.3	その他 15.6	146 100.0
48年	総 32.6	ナイロン 42.9	ポリエステル 13.0	その他 43.1	108 100.0
49年	総 36.7	ナイロン 29.7	ポリエステル 16.5	その他 41.8	139 100.0
50年					
51年	総 88.7	ナイロン 37.9	ポリエステル 15.6	その他 35.2	139 100.0
52年	総 37.7	ナイロン 37.8	ポリエステル 11.0	その他 31.7	147 100.0
53年	総 17.7	ナイロン 31.9	ポリエステル 13.7	その他 52.4	161 100.0
54年	総 16.4	ナイロン 34.2	ポリエステル 12.1	その他 53.7	164 100.0
55年	総 16.0	ナイロン 34.5	ポリエステル 12.1	その他 53.4	155 100.0
56年	総 16.0	ナイロン 34.6	ポリエステル 12.2	その他 53.2	145 100.0
57年	総 17.2	ナイロン 37.8	ポリエステル 16.8	その他 45.4	153 100.0

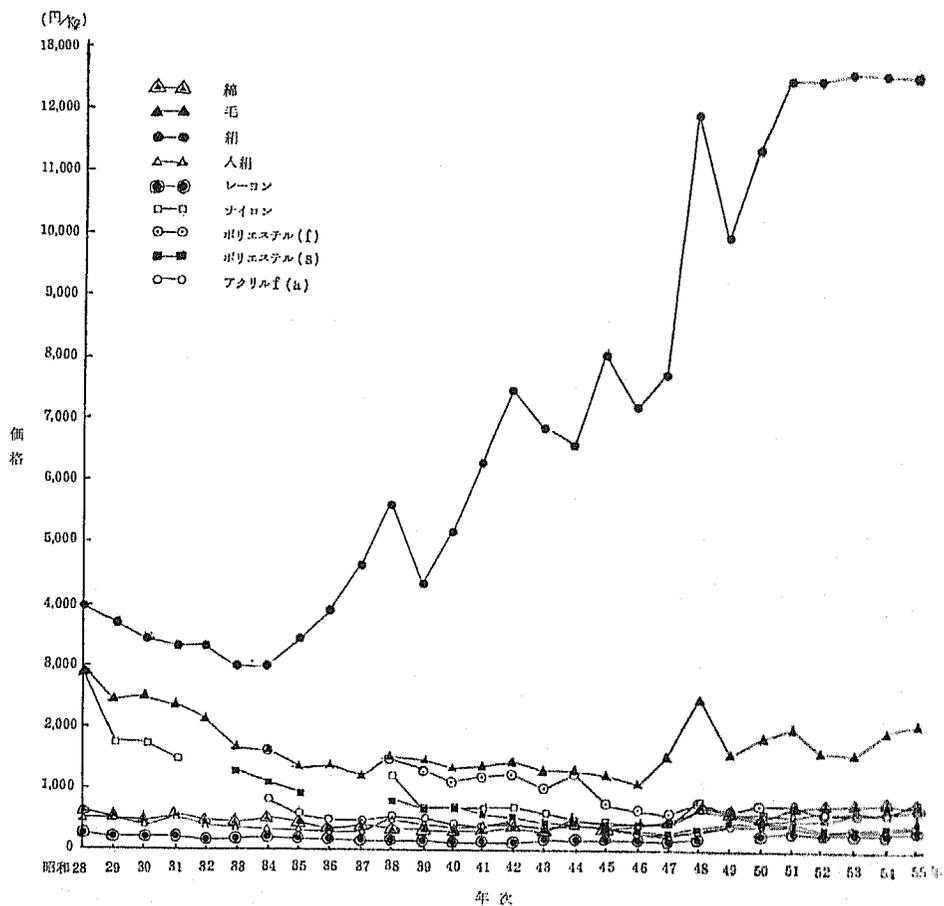
第27図 婦人用中衣（ブラジャー）用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用（織物・編物）繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



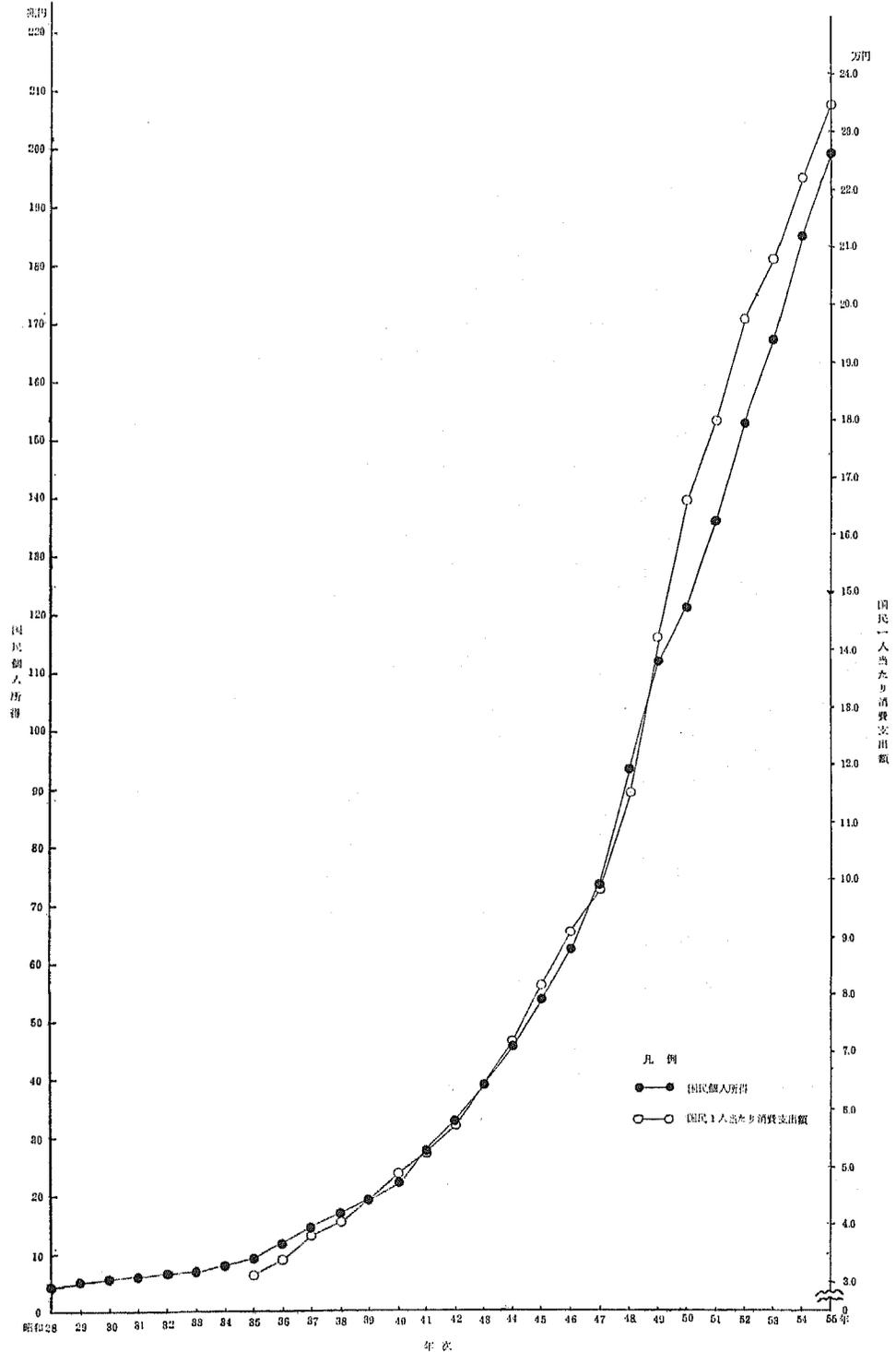
第28図 婦人用中衣 (ファンデーション・その他) 用繊維別消費量構成比の推移

(注) 日本化学繊維協会編『内需衣料用及び家庭用 (織物・絹物) 繊維消費量調査報告書』の各年度のものにより計算し作成。



第29図 日本における主要繊維の価格の推移

(注) 今村文繁「繊維統計資料」昭.58, 未公表資料によって作成。



第30図 日本における国民個人所得と国民1人当たり消費支出の推移
 (注) 朝日新聞社編『民力』の各年度のものにより計算し作成。

3 む す び

繊維競合原理を導き出していくためには、まず、繊維競合の実態を十分知悉していなければならぬ。この実態把握の上に立ってこそ、何故競合関係が繊維間に起こったかが解明されるのである。いま、主要な繊維の価格の推移を図示すると第29図のようになるが、繊維の競合の一つの原因が、価格、ことに相対価格ともいわれるが、これを実証するためには、繊維消費量の増減と価格との相関関係を厳密にみなければならぬ。

また繊維競合の要因が品質あるいは性能といわれるが、用途別繊維消費量の変化に応じて、その都度、繊維自体の生産技術の発展度と消費者の欲求 (needs) の変化を調査していかななくてはならぬ。さらには、繊維を選択する背景には消費者の所得の増減と支出の変化などが存在するものと考えられる。したがって、繊維競合を調査していくためには個人所得や消費支出の変化と繊維選択の相関関係をみなければならぬ。マクロ的には個人所得や国民1人当たりの消費支出の傾向は、確かに第30図のとおりであるが、これらの傾向がどの程度繊維選択に影響するかを十分検討しなければならぬ。したがって、これらの繊維競合の要因の分析は、多くの研究調査を重ねなければならぬので、このことについては次の機会に譲りたい。

Summary

A Study on the Principle of the Textile Inter-fibre Competition
(Part II); The Textile Inter-fibre Competition in Japan

Masaji MIYASAKA*

(Received September 10, 1984)

The purpose of this paper is to investigate the present conditions of the textile inter-fibre competition in Japan. The approach methods of this report are raised the following. The author studied the present conditions of the textile inter-fibre competition on the basis of valuable statistical data prepared by Japan Chemical Fibre Association. Already the author studied the conditions of the phenomenon called the inter-fibre competition in the United States of America.

The author studied the textile inter-fibre competition on the ground of the analysis of the men's clothings and the women's clothings. Generally speaking, men are conservative in their clothing habits, and as a whole the natural fibres are used by men. However women like the new fashion in their clothing habits, and as a whole the man-made fibres are used by women. Accordingly, the type of the men's clothing substitutes the natural fibres for the man-made fibres in the textile inter-fibre competition from the year 1970 to the year 1982 in Japan. But the type of the women's clothing substitutes the man-made fibres for the natural fibres for same period.

The causes of the textile inter-fibre competition depend on many factors. The author will take up the changes in relative price as the most important cause of the textile inter-fibre competition. Generally man-made fibres have a tendency to decline in price compared with natural fibres. The relative prices of man-made fibres will be able to show a more sharp decline in price through mass production. In addition, as the man-made fibres have more chances for technical improvement, they will become favourable for their price and quality.

The author will take up the qualities of the textile as the most important cause, furthermore. The man-made fibres have more the technical and cultural merits than the natural fibres. Because the man-made fibres will be able to improve easily compared with natural fibres.

* Professor of Industrial Management, the Faculty of Textile Science and Technology, Shinshu University.